



立 田 慶 裕 教 授

経 歴

【学 歴】

- 1972年 3 月 私立甲陽学院高校卒業
1972年 4 月 大阪大学人間科学部入学
1976年 3 月 大阪大学人間科学部卒業（社会学士）
1979年 3 月 大阪大学大学院人間科学研究科前期（修士）課程修了（教育学修士）
1980年 3 月 大阪大学大学院人間科学研究科後期（博士）課程単位取得退学

【職 歴】

- 1980年 4 月 大阪大学人間科学部社会教育論講座助手
1985年 4 月 東海大学文明研究所専任講師
1988年 4 月 東海大学文明研究所助教授
1991年10月 国立教育研究所生涯学習研究部主任研究官（～1994年 3 月）
1993年 4 月 文部省生涯学習局生涯学習調査官（～1997年 3 月）兼務
1994年 1 月 ドイツ・ユネスコ教育研究所理事代理（～1997年12月）兼務
1994年 4 月 国立教育研究所生涯学習研究部生涯学習開発・評価研究室 室長
1998年 1 月 ドイツ・ユネスコ教育研究所理事（～2002年12月）兼務
2000年 4 月 国立教育政策研究所生涯学習政策研究部 総括研究官（～2014年 3 月）
2014年 4 月 神戸学院大学人文学部教授
2018年 4 月 放送大学客員教授（兼務）（～2022年 9 月）
2018年 4 月 神戸学院大学教職教育センター副センター長（～2023年 3 月）
2024年 3 月 神戸学院大学定年退職

【非常勤】

- 大阪大学（人間科学研究科） 1998年 4 月～1999年 3 月
神奈川大学（教職課程 生涯学習論） 1999年 4 月～2003年 3 月
東京大学（大学院教育行政コース） 2000年 4 月～2001年 3 月
大阪大学（人間科学研究科） 2000年 4 月～2001年 3 月
上智大学（文学研究科教育学専攻） 2001年 4 月～2006年 3 月
青山学院大学（文学部教育学専攻） 2001年 4 月～2007年 3 月
鳴門教育大学（学校教育学部 生涯学習論担当） 2001年 4 月～2024年 3 月（隔年）
大阪大学（人間科学研究科） 2002年 4 月～2003年 3 月
東京大学（大学院教育行政コース） 2004年 4 月～2005年 3 月
大阪大学（人間科学研究科） 2004年 4 月～2005年 3 月
法政大学キャリアデザイン学部 2005年 4 月～2006年 3 月
東京大学（教育学部社会教育学基礎理論） 2005年 4 月～2008年 3 月
徳島大学（教職課程 生涯学習論） 2009年 4 月～2010年 3 月
法政大学大学院キャリアデザイン研究科 2009年 4 月～2010年 3 月
京都学園大学（集中講義 教育方法論） 2015年～2018年
京都先端科学技術大学（集中講義 教育方法論） 2019年～2020年

研究業績

【主な著作】

(単著)

- 『社会教育調査の技術 I』 国立教育会館社会教育研修所、1988年
『キー・コンピテンシーの実践』 明石書店、2014年 3 月
『生涯学習の新しい動向と課題』 放送大学教育振興会、2018年 3 月
『世界の大学図書館』 明石書店、2024年 4 月刊行予定

(編著)

1. 『ライフロング・ソシオロジー』. 元田州彦と共編. 東海大学出版会. pp.79-115担当. 1991年
2. 『拓きゆく生涯学習』. 西野仁、田中雅文と共編. 学文社. pp.112-159担当. 1995年
3. 『生涯学習の現代的課題』. 全日本社会教育連合会. pp.127-166担当. 1996年
4. 『学びのスタイル』. 赤尾勝己と共編. 玉川大学出版部. pp.15-26、pp.92-106、pp.213-231担当. 1996年
5. 『学びのデザイン』. 赤尾勝己と共編. 玉川大学出版部. pp.12-29、pp.140-159担当. 1998年
6. 『生涯学習論』. 川野辺敏と共編. 福村出版. pp.128-140担当. 1999年
7. 『メディアと生涯学習』. 笹井宏益と共編. 玉川大学出版部. pp.1-8、pp.17-82担当. 2000年
8. 『公民館事業 Q & A』. 坂井知志と共編. ぎょうせい. pp.8-13、pp.16-23、pp.72-79、pp.162-175、pp.240-242担当. 2000年
9. 『勉強せえ』. 鍋島祥郎と共編. 日常出版. pp.67-84担当. 2003年
10. 『人生を変える生涯学習の力』. 小宮山博仁と共編. 新評論. pp. i ～viii、pp.162-187担当. 2004年
11. 『参加して学ぶボランティア』. 玉川大学出版部. pp.3-5、pp.11-23、pp.24-49、pp.169-181担当. 2004年
12. 『教育研究ハンドブック』. 世界思想社. pp.iii ～vi、pp.28-39、pp.229-257担当. 2005年
13. 『家庭・学校・地域を育む発達資産—新しい視点の生涯学習』. 岩槻知也と共編. 北大路書房. pp.148-164担当. 2007年
14. 『学校教員の現代的課題』. 今西幸蔵と共編. 法律文化社. pp.2-17、pp.40-48担当. 2010年
15. 『教師のための防災教育ハンドブック』. 学文社. pp.1-7、pp.149-162、pp.173-182担当. 2013年
16. 『読書教育の方法—学校図書館の活用に向けて』. 学文社. pp. i ～iv、pp.3～18、pp.223-225担当. 2015年

17. 『読書教育のすすめ—学校図書館と人間形成』. pp. i -ix、pp.3-18、pp.217-232. 学文社.
2023年10月

(共著)

1. 『公民館の活性化への途』. 岡本包治他編. pp.133-142担当. 日常出版. 1988年
2. 『高齢化社会の諸問題』. 立山龍彦編. pp.213-232担当. 東海大学出版会. 1991年
3. 『生涯学習概論』. 香川正弘編. pp.69-87担当. 東洋館出版社. 1992年
4. 『地方自治体と生涯学習』. 日本社会教育学会編. pp.53-68担当. 日本の社会教育第38集. 東洋館出版社. 1994年
5. 『変化の時代の学校像』. 菱村幸彦編著. pp.14-17担当. 教育開発研究所. 1995年
6. 『新学力観に立つ5日制学校経営』. 教職研修編集部. 「地域に開かれた学校づくり」担当. 教育開発研究所. 1996年
7. 『教職「大変な時代」』. 牧昌見編著. pp.214-219担当. 教育開発研究所. 1997年
8. 『広がる学び開かれる大学—生涯学習時代の新しい試み—』. 小野元之・香川正弘編著. pp.20-33担当. ミネルヴァ書房. 1998年
9. 『フロンティア人間科学』. 中島義章他と共著. pp.66-77担当. 放送大学教育振興会. 1998年
10. 『事例に学ぶ学校と地域のネットワーク』. 今野雅裕らと共著. pp.17-19、pp.246-248担当. ぎょうせい. 1998年
11. 『柔軟な教育課程の編成』. 新井郁男編. pp.92-98担当. 教育開発研究所. 1999年
12. 『「総合的な学習の時間」で基礎的素養を育む』. 山極隆編著. pp.250-253担当. 教育開発研究所. 1999年
13. 『中学校「総合的な学習の時間」』. 高階怜治編. pp.67-69担当. 教育開発研究所. 1999年
14. 『社会教育委員のための生涯学習』. 伊藤俊夫. pp.63-68、pp.81-86担当. 全日本社会教育連合会. 1999年
15. 『科学的方法論の近代と教養教育研究』 東海大学文明研究所編. 「大学教育の変容と課題—探求型学習の可能性」 pp.2-30担当. 2000年3月
16. 『私らしい生きかたを求めて—女性の生涯学習』. 岩崎久美子他編著. pp.174-198担当. 玉川大学出版部. 2002年
17. 『生涯学習社会の学習論』. 鈴木真理・永井建夫編. pp.113-132担当. 学文社. 2003年
18. 『メディア・リテラシーへの招待』. 国立教育政策研究所編. pp.7-13、pp.157-169担当. 東洋館出版社. 2004年
19. 『生涯学習理論を学ぶ人のために』. 赤尾勝己編. pp.227-259担当. 世界思想社. 2004年
20. 『教育改革の論争点』. 市川昭午編. pp.164-165担当. 教育開発研究所. 2004年
21. 『講座現代社会教育の理論①現代教育改革と社会教育』. 日本社会教育学会編. pp.67-84担当. 東洋館出版社. 2004年

22. 『新社会教育委員手帳』. 坂本登編. pp.251-261担当. 日常出版. 2005年
23. 『生涯学習概論』. 伊藤俊夫編著. pp.20-25担当. 文憲堂. 2006年
24. 『大学生活ナビ』. 玉川大学コア FYE 教育センター編. pp.278-291担当. 玉川大学出版部. 2006年
25. 『現代のエスプリ生涯学習社会の諸相』. 赤尾勝己編. pp.68～81、pp.156～168担当. 至文堂. 2006年
26. 『キャリア教育への招待』. 国立教育政策研究所編. pp.95-103担当. 東洋館出版社. 2007年
27. 『教師のための防災教育ハンドブック』. 山田兼尚編著. pp.144-157担当. 学文社. 2007年
28. 『よくわかる生涯学習』. 鈴木真理他編. pp.200-203担当. ミネルヴァ書房. 2008年
29. 『健康教育への招待』. 国立教育政策研究所編. pp.5-20、pp.149-168、pp.281-293担当. 東洋館出版社. 2008年
30. 『改訂実践教育評価事典』. 梶田叡一他編. pp.162-163担当. 文溪堂. 2010年
31. 『読書教育への招待』. 国立教育政策研究所編. pp.5-11、pp.204-226担当. 東洋館出版社. 2010年
32. 『生涯学習の理論—新たなパースペクティブ』 井上豊久他と共著. pp.7-13、pp.48-68、pp.180-202担当. 福村出版. 2011年
33. 『成人力とは何か』. 国立教育政策研究所編. pp.25-51、pp.71-103、pp.167-183担当. 明石書店. 2012年
34. 『よくわかる教育学原論』. 安彦忠彦他編. pp.236-237、pp.238-239担当. ミネルヴァ書房. 2012年
35. 『ながお先生と考える学校安全36のナラティブ』. 長尾彰夫編著. pp.142-147担当. 教育出版. 2013年
36. 『PISA 型学力を育てる』. 日本人間教育学会編. 教育フォーラム Vol.57. pp.6-17担当. 2016年2月
37. 『図書館と学校が地域をつくる』 公益財団法人図書館振興財団. 「第10章 地域コンクールに取り組むきっかけとその成果」担当. 学文社. 2016年11月
38. 『新版よくわかる教育学原論』 安彦忠彦他と共著. pp.244-247. ミネルヴァ書房. 2020年5月

【翻訳】

1. Cummings. W. K. (1980)、“Eucation and Equality in Japan”、『ニッポンの学校』 友田泰正監訳、サイマル出版会、pp.56-99、pp.100-131担当、1981年
2. Almond. B. & Wilson. B. (1988)、“Values”、『価値』 玉井治・山本慶裕訳、東海大学出版会、pp.111-171担当、1994年
3. Federighi. P. Edit.(1998)、“Grossary of Adult Learning In Europe”、『国際生涯学習キーワード事典』 佐藤一子・三輪健二監訳、東洋館出版社、p.23、pp.37-38、pp.42-43、p.64、

- pp.112-113、p.131、p.178、p.180、pp.183-184担当、2001年
4. Merriam. S. B. & Caffarella. R. S. (1998)、“Learning in Adulthood”『成人期の学習』立田慶裕・三輪建二監訳、鳳出版、pp.229-261、pp.483-492、pp.317-319担当、2005年
 5. OECD (2004)、“Lessons in Danger”、『学校の安全と危機管理』監訳（安藤友紀と共訳）、明石書店、pp.3-180担当、2005年
 6. OECD 教育研究革新センター（2006）、“Think Scenarios. Rethink Education”、『OECD 未来の教育改革 教育のシナリオ—未来思考による新たな学校像』監訳（伊藤素江他と共訳）、pp.3-85担当、明石書店、2006年
 7. Rychen. D. S. & Salganik. L. H. (2003)、“Key Competencies for Successful Life and Well-Functioning society”、『キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして』監訳、明石書店、pp.3-33、pp.193-228担当、2006年
 8. OECD 教育研究革新センター（2008）、“Trend Shaping Education”、『教育のトレンド』監訳、座波圭美と共訳、pp.49-56、pp.71-80担当、明石書店、2009年
 9. OECD 教育研究革新センター（2007）、“Human Capital: How What You Know Shapes Your Life”、『よくわかるヒューマン・キャピタル—知ることがいかに人生を形作るか』、明石書店、2010年
 10. OECD (2005)、“Promoting Adult Learning”、『世界の生涯学習—成人学習の促進に向けて』監訳、長岡智寿子他と共訳、pp.13-23担当、明石書店、pp.5-23、pp.163-164担当、2010年
 11. Merriam. S. B. edit. (2008)、“Third Update on Adult Learning Theory”、『成人学習理論の新しい動向』岩崎久美子他と共訳、福村出版、pp.7-8、pp.12-16、pp.46-59、pp.105-118、pp.140-141担当、2010年
 12. Fields. J. (2005)、“Social Capital and Lifelong Learning”、『ソーシャルキャピタルと生涯学習』矢野裕俊監訳、東信堂、pp.47-98担当、2011年
 13. OECD 教育研究革新センター（2010）、“Trend Shaping Education 2010”、『教育のトレンド2』監訳、宮田緑と共訳、明石書店、2011年
 14. OECD 教育研究革新センター（2010）、“Improving Health and Social Cohesion Through Education”、『教育と健康・社会的関与—学習の社会的成果を検証する』矢野裕敏他と共訳、明石書店、pp.221-245担当、2011年
 15. OECD 教育研究革新センター（2000）、“Knowledge Management in the Learning Society”、『知識の創造・普及・活用—学習社会のナレッジ・マネジメント』監訳、織田泰幸他と共訳、明石書店、pp.3-194、pp.495-501担当、2012年
 16. Rossiter. M. & Clark M. C. (2010)、“Narrative Perspectives on Adult Education”、『成人のナラティブ学習—人生の可能性を拓くアプローチ』岩崎久美子他と共訳、福村出版、pp.66-84、pp.145-148担当、2012年
 17. OECD 教育研究革新センター（2010）、“The Nature of Learning”、『学習の本質—研究の活用から実践へ』立田慶裕・平沢安政監訳、明石書店、pp.3-24、pp.363-405、pp.410-414担当、2013年

18. Lawrence. R. L. (2012)、“Bodies of Knowledge: Embodied Learning in Adult education”、『身体知—成人教育における身体化された学習』岩崎久美子他と共訳. pp. 3-8. pp.17-28担当. 福村出版. 2016年3月
19. OECD 教育研究革新センター (2013)、“Innovative Learning Environment”、『学習の環境—イノベーティブな実践に向けて』監訳. pp.3-17. pp.243-291. pp.317-355担当、2023年3月

【事典】

1. 『生涯学習事典』日本生涯教育学会編、東京書籍刊、「民間教育事業」担当1990年
2. 『国際生涯学習キーワード事典』パオロ・フェリーギ編佐藤一子・三輪健二監訳、p.23, pp.37-38, pp.42-43, p.84, pp.112-113, p.131, p.178, p.180, p.183-184, 2001年9月
3. 『新版現代学校教育大事典』安彦忠彦他編、ぎょうせい刊、「社会体育」「社会体育施設」「巡回相談」「生涯設計」「人材バンク」、「モデル・コミュニティ」担当、2002年
4. 『生涯学習・社会教育実践用語解説』伊藤俊夫編著、全日本社会教育連合会刊、「男女共同参画社会」「生活設計」「高齢者教育」「少子化社会」担当、2002年
5. 『新版学校教育事典』新井郁男編著、教育出版刊、「公開講座」「学校外教育」「公民館」「ボーイスカウト・ガールスカウト」「生涯学習審議会」「専門学校」「朝の読書運動」「音楽文化振興法」「高校開放講座」「高齢者教育」「生涯学習フェスティバル」「成人学校」「世代間交流」「まなびネット」「ジェルピ」「ラングラン」担当、2002年刊
6. 『生涯学習 e 事典』日本生涯教育学会編、「知識社会と生涯学習」(2006年)、「学習する組織」(2006年)、「キー・コンピテンシーと生涯学習」(2008年) 担当、(<http://ejiten.javea.or.jp/> 2024/02/09取得)
7. 『改訂実践教育評価事典』梶田叡一他編、文溪堂刊、「キー・コンピテンシーとリテラシー」担当、2010年

【報告書】

1. 『こども文庫に関する調査報告—大阪府茨木市における事例研究』、「第3章 茨木市における文庫活動の背景」担当、大阪大学人間科学部社会教育論講座、1981年2月
2. 『民間教育文化事業（第一次報告）—大阪朝日カルチャーセンターに関する調査研究—』、pp.71-90担当、大阪大学人間科学部社会教育論講座、1981年9月
3. 『大阪市における市民の学習と余暇—都心部住民を対象として—』、pp.3-18、pp.21-36、pp.63-84担当、大阪大学人間科学部社会教育論講座、1982年3月
4. 『ニュータウンの中の図書館—吹田市立千里図書館利用者調査—』、pp.83-92担当、大阪大学人間科学部社会教育論講座刊、1982年、月
5. 『生涯教育に関する基本調査報告書—尼崎市—』、pp.66-86、pp.161-168担当、大阪大学人間科学部社会教育論講座、1983年3月
6. 『民間教育文化事業（第2次報告）総合文化教室に関する調査研究』、pp.57-89担当、大阪大学人間科学部社会教育論講座、1984年11月

7. 『松原の市民図書館—こども文庫から図書館システムへ—』 大阪大学人間科学部社会教育論講座、pp.139-209担当、日本図書館研究会、1984年11月
8. 『地域における民間教育関連事業の実施状況に関する事例研究—郊外都市型のカルチャーセンターを中心として—』 山本慶裕、総頁担当、東海大学、1988年3月
9. 『自由時間教育（余暇学習）に関する理論的解明』 日本余暇文化振興会、pp.102-109担当、日本余暇文化振興会、1991年3月
10. 『生涯学習の事業内容と問題点』 国立教育研究所、pp.4-152、pp.265-274担当、ぎょうせい、1992年3月
11. 『生涯学習事業の提供に関する調査研究』 全国民間カルチャー協議会、pp.72-79担当、産業研究所、1992年5月
12. 『生涯学習の研究—その理論・現状と展望・調査資料—（上）』 国立教育研究所生涯学習研究会、pp.10-18、pp.107-125担当、エムティ出版、1993年3月
13. 『生涯学習の研究—その理論・現状と展望・調査資料—（下）』 国立教育研究所生涯学習研究会、pp.269-291担当、エムティ出版、1993年3月
14. 『生涯学習の成果の評価方法に関する実証的研究』、総108頁担当、国立教育研究所（科学研究費報告書）、1993年3月
15. 『生涯学習の知識ネットワーク』 山田達雄編、pp.9-26担当、大学経理研究会、1993年5月
16. 『民間カルチャーセンター受講者の学習意識に関する調査研究』 全国民間カルチャー事業協議会、pp.46-64担当、産業研究所、1993年6月
17. 『高齢化社会における生涯学習の現状と課題』 「高齢化社会に対応した生涯学習政策・プログラムの開発に関する総合的研究」 中間報告、生涯学習研究部、共同執筆、国立教育研究所（科学研究費報告書）、1994年3月
18. 'Lifelong learning in Japan' "Lifelong Education in selected Industrialised countries" 所収、川野辺敏他と共著、ユネスコ IIEP、1994年、
19. 『公民館活動の活発化に関する調査研究』 全国公民館連合会、pp.3-12、pp.22-28担当、社団法人全国公民館連合会、1994年、
20. 『複合型カルチャーサービス事業の今後の方向に関する調査報告書』 全国民間カルチャー協議会、「経営基盤の改善」担当、全国民間カルチャー協議会、1994年、
21. 『生涯学習：日本と世界（下）』 川野辺敏編著、pp.287-304担当、エムティ出版、1995年3月
22. 『世代間交流による高齢者の社会参加促進に関する基礎研究論文・資料集』 青井和夫他編、pp.95-122担当、長寿社会開発センター、1995年3月
23. 『生涯学習のボランティア・バンクに関する調査研究』 山本慶裕編、総頁担当、国立教育研究所（科学研究費報告書）、1996年3月
24. 『高齢化社会に対応した生涯学習の政策・プログラムの開発に関する総合的研究』、総357頁担当、国立教育研究所、1996年3月
25. 『生涯学習社会における民間外国語教育施設の在り方に関する調査研究』、総210頁担

- 当、全国外国語教育振興協会、1996年3月
26. 『Comparative Studies on Lifelong Learning Policies』、pp. 42-49 担当、National institute for Educational Research of Japan and UNESCO Insitute for Education、1997年3月
 27. 『市区町村における生涯学習ボランティアバンクの活性化に関する実証的研究』、総頁担当、国立教育研究所（科学研究費報告書）、1997年3月
 28. 『Research Bulletin of the National institute for Educational Research of Japan』、pp.76-97担当、国立教育研究所、1997年、月
 29. 『生涯学習音楽指導員養成制度への課題』、pp.17-21、pp.22-25担当、財団法人音楽文化創造、1998年3月
 30. 『OECD 国際成人リテラシー調査に対応した成人学習調査に関する研究』文部省科学研究費研究成果報告書（平成8－9年度基盤研究A1）、pp.76-85担当、国立教育研究所生涯学習研究部（科学研究費報告書）、1998年3月
 31. 『専門学校における教育改善と18歳人口急減期への対応に関する調査研究』倉内史郎編、pp.86-95、pp.112-128担当、文部省科学研究費研究成果報告書（平成7－9年度基盤研究A1）、1998年3月
 32. 『課題別学習プログラムの展開』、pp.3-4、pp.18-23、pp.52-59担当、東京都教育庁生涯学習部、1998年3月
 33. 『マルチメディアと成人を対象とした情報教育の在り方に関する調査研究報告書』水越敏行他と共著、pp.31～74、pp.104～110担当、日本放送教育協会、1998年3月
 34. 『ヨーロッパにおける各国の民間非営利団体（NPO）による生涯学習施策の現状と21世紀への展望』、pp.49-61担当、日本余暇文化振興会、1998年3月
 35. 『事例に学ぶ学校と地域のネットワーク』今野雅裕らと共著、pp.17-19、pp.246-248担当、ぎょうせい、1998年9月
 36. 『学びを創る－参加型講座の開発－』東京都教育庁編、pp.44-51、pp.70-75担当、東京都教育庁生涯学習局生涯学習振興課、1999年3月
 37. 『教育の役割構造の変容に伴う学社連携のパラダイム展開に関する研究』澤野由紀子編、pp.62-105担当、国立教育研究所、1999年3月
 38. 『生涯学習スタッフの養成プログラムの実態に関する国際比較研究』山本慶裕編、pp. 99-110、pp.119-124担当、国立教育研究所（科学研究費報告書）、1999年3月
 39. 『現代的課題に対応した公民館の事業企画用ソフトウェアの開発研究』山本慶裕著、総13頁担当、国立教育研究所（科学研究費報告書）、1999年3月
 40. 『生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究－社会教育編－』、pp.72-79、pp.127-140担当、国立教育研究所、1999年10月
 41. 『高等教育機関相互の学習支援ネットワークの形成過程とその制度化に関する総合的研究』鬼頭尚子編、pp.1-16担当、国立教育研究所（科学研究費報告書）、2000年3月
 42. 『高等学校の学校開放講座に関する実証的研究』、pp.29-50、pp.75-82、83-98、pp.111-116担当、国立教育研究所（科学研究費報告書）、2000年3月

43. 『福祉教育・ボランティア学習の構造と実践に関する総合的研究』、pp.114-129担当、国立教育研究所、2001年3月
44. 『男女共同参画の視点に立った家庭教育推進方策に関する調査研究報告書』、pp.193-203担当、国立女性教育会館、2001年3月
45. 『生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究—社会教育編第2次報告書』、pp.107-166担当、国立教育政策研究所、2001年9月
46. 『生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究—社会教育編最終報告書』、pp.76-106担当、国立教育政策研究所、2002年3月
47. 『生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究—学校教育編最終報告書』、pp.113-137担当、国立教育政策研究所、2002年3月
48. 『生涯学習社会における知識創造型学習に関する総合的研究』立田慶裕編、pp.1-38担当、国立教育政策研究所、2002年3月
49. 『生涯学習の学習需要の変化に関する縦断的研究』山田兼尚編、pp.71-84担当、国立教育政策研究所（科学研究費報告書）、2002年3月
50. 『生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究—比較教育編最終報告書』、pp.155-159、pp.161-162担当、国立教育政策研究所、2002年11月
51. 『平成14年度社会教育事業の開発・展開に関する調査研究事業 生涯学習センター等の連携方策に関する調査研究報告書』国立教育政策研究所社会教育実践研究センター編、pp.32-34、pp.35-40担当、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、2003年3月
52. 『平成15年度社会教育事業の開発・展開に関する調査研究事業 生涯学習センター等の連携方策に関する調査研究報告書』国立教育政策研究所社会教育実践研究センター編、pp.3-21担当、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、2004年3月
53. 『生涯にわたるキャリア発達の形成過程に関する総合的研究報告書(1)』山田兼尚編、pp.187-206担当、国立教育政策研究所、2005年3月
54. 『成人技能に関する調査研究』平成16年度生涯学習施策に関する調査研究報告書、立田慶裕編、総207頁担当、国立教育政策研究所、2005年3月
55. 『生涯にわたる読書能力の形成に関する総合的研究』立田慶裕編、pp.1-11、pp.43-49担当、科学研究費報告書平成16～18年度基盤研究B、2006年3月
56. 『基礎体力の向上をめざす生涯にわたる健康教育の総合的研究』中間報告書、「健康教育政策に関する主要資料」担当、国立教育政策研究所、2006年3月
57. 『生涯にわたるキャリア発達の形成過程に関する総合的研究報告書Ⅲ』山田兼尚編、pp.66-75担当、国立教育政策研究所、2006年3月
58. 『International Conference on Education toward Social Capital Formation』、Korean Educational Development Institute Ed.、pp. 31-47 担当、Korean Educational Development Institute、2008年10月
59. 『知識基盤社会を生きる力「キー・コンピテンシー」をめぐる国際的動向』国立教育政策研究所編、pp.61-66担当、国立教育政策研究所、2009年1月

60. 『子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究【教員調査ワーキンググループ】報告書』国立青少年教育振興機構、総218頁、リーダーとして監修・執筆、2013年3月
61. 『「子どもの読書活動と人材育成に関する調査研究」【外国調査ワーキンググループ】報告書』第1章を荻野亮吾と共筆、2013年3月
62. 『地域における体力づくりと生涯にわたる健康学習に関する研究報告書—地域力再発見をめざす大学と地域との連携・協働による実践的研究—』神戸学院大学地域研究センター、pp.64-83担当、2014年3月
63. 『PBL学習及び教職課程「履修カルテ」作成のための教育方法論の開発研究』2014年度神戸学院大学教育改革助成金研究成果報告書、総50頁担当、2015年3月
64. 国立教育政策研究所編『多様なパートナーシップによるイノベティブな生涯学習環境の形成に関する研究報告書（国内及び海外の先進的事例調査）』共著、pp.84-90、pp.289-316担当、2016年3月
65. 国立教育政策研究所編『多様なパートナーシップによるイノベティブな生涯学習環境の形成に関する研究報告書（総論）』共著、pp.55-64担当、2016年3月
64. 『eポートフォリオを活用した教育方法論の開発研究』2018年度神戸学院大学教育改革助成金研究成果報告書、単著、全52頁、2019年3月

【学会発表】

1. 「中小企業経営者—その学歴と補充類型」関西教育社会学研究会（神戸女学院大学）、1979年
2. 「中小企業経営者層の形成に関する実証的研究」日本教育社会学大会第31回大会（文教大学）、1979年
3. 「民間教育文化事業に関する調査研究—大阪朝日カルチャーセンターを事例として—」（堀薫夫他と共同発表）日本社会教育学会第28回大会（秋田大学）、1981年
4. 「都心施設における学習者の階層分析」（堀薫夫と共同発表）日本社会教育学会関西6月集会（芦屋市民ホール）、1982年
5. 「都心部住民の学習要求と学習活動に関する階層別分析」（森実他と共同発表）日本教育社会学第34回大会（広島大学）、1982年
6. 「民間教育文化事業の動向と課題」日本社会教育学会第30回大会（大阪大学）、1983年
7. 「公共図書館システムに関する実証的研究—松原市民図書館を事例として—」（永井和子と共同発表）日本社会教育学会第31回大会（東京学芸大学）、1984年
8. 「大企業経営者のキャリア形成について」（高瀬武典と共同発表）日本社会学会第58回大会（横浜国立大学）、1985年
9. 「大企業経営者のキャリア形成について」東海大学現代法研究会（東海大学湘南校舎）、1986年
10. 「民間教育文化事業の現状と課題」日本社会教育学会第33回大会（早稲田大学）1986年
「カルチャーセンターの文化的役割について」東海大学日本文明研究会（東海大学湘南校舎）、1987年

11. 「自治体および民間における生涯教育事業の動向—文部省『生涯教育事業調査』の再考察—」手打明敏、田中雅文他と共同発表、日本生涯教育学会第8回大会（国立教育会館社会教育研修所）1987年11月
12. 「高度情報化社会における民間教育文化事業の役割」日本社会教育学会第35回大会（九州大学）、1988年10月
13. 「郊外都市型カルチャーセンターの事例研究—受講者の学習経験を中心に—」日本生涯教育学会第9回大会（国立教育会館社会教育研修所）、1988年11月
14. 「有職者の生涯生活設計に関する実証的考察—教職員の生涯生活設計調査結果より—」日本教育社会学会第46回大会（相山学院大学）、1994年10月
15. 「学校教員の生涯学習」北海道教育大学国際シンポジウム「教育系大学における生涯学習と大学開放」、1995年9月
16. 「学社連携・融合事業の社会的効果に関する実証的研究」日本社会教育学会第46回大会（早稲田大学）、加藤かおりと共同発表、1998年
17. 「生涯学習研究の課題を問う」日本生涯教育学会第20回大会（安田女子大学）沖吉和祐・有本章とのシンポジウム、1998年
18. 「生涯学習社会におけるメディアリテラシーに関する総合的研究」日本教育社会学会第53回大会（上智大学）加藤かおり、阿形健司と共同発表、2001年
19. 「生涯学習社会におけるメディアリテラシーに関する総合的研究(1)」日本生涯教育学会第22回大会（国立教育政策研究所）、岩崎久美子、井上豊久と共同発表、2001年
20. 「生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究(2)—ITは職場をどう変えたか—」日本生涯教育学会第23回大会（国立教育政策研究所）岩崎久美子、井上豊久と共同発表、2002年
21. 「知識社会を開く教育経営の可能性—知識社会の教育システム」日本教育経営学会第45回大会（横浜国立大学）シンポジスト、2005年
22. 「大学の教育支援コミュニティの創造に向けて—知識経営モデルの活用—」大学教育学会第2005年度課題研究集会（新潟大学）シンポジスト、2005年
23. 「生涯にわたる読書活動に関する実証的研究」日本教育社会学会第58回大会（大阪教育大学）岩槻知也と共同発表、2006年
24. 「生涯にわたる健康教育に関する調査研究」日本教育社会学会第59回大会（茨城大学）今西幸蔵と共同発表、2007年
25. 「国際成人教育会議の経緯」日本社会教育学会6月集会（日本社会福祉事業大学）2008年
26. 「キー・コンピテンシーとは」日本看護学教育学会 第18回学術集会（筑波大学）講演、2008年
27. 「言語力の向上をめざす生涯にわたる読書教育の実証的研究」日本生涯教育学会第30回大会（国立教育政策研究所）今西幸蔵、井上豊久、赤尾勝巳と共同発表、2009年
28. 「教育のナレッジマネジメント」日本教育社会学会第62回大会（関西大学）岩崎久美子、粕井圭子と共同発表、2010年

【主な学術論文（査読有）】

1. 「中小企業経営者層の学歴と補充類型」大阪大学人間科学部紀要. 第8巻. pp.61-82. 1982年
2. 「民間教育文化事業と公的社会教育の受講者に関する調査研究」『行政改革と社会教育』日本の社会教育第27集、島田修一編、堀薫夫と共著、pp.74-86. 東洋館出版社、1983年
3. 「公共図書館のアクセシビリティに関する実証的研究」大阪大学人間科学部紀要第11号. pp.217-245. 1985年
4. 「カルチャーセンターの地域的特性に関する調査研究」東海大学文明研究所紀要第6号. pp.13-33. 1986年
5. 「生涯教育機関としてのカルチャーセンター—その教育的特性に関する考察—」東海大学文明研究所紀要第7号. pp.1-15. 1987年
6. 「ビジネスエリートの地位達成過程—大企業経営者の出身と経歴に関する調査より—」日本労働協会. 日本労働協会雑誌8月号337号. 高瀬武典と共著、pp.21-32. 1987年
7. 「大企業経営者の地位達成過程に及ぼす準拠人の影響に関する考察」東海大学文明研究所紀要第8号. pp.1-9. 1988年
8. 「高度情報化社会における民間教育文化事業の役割」日本社会教育学会紀要、pp.7-10. 1989年
9. 「民間の生涯学習事業の可能性と問題点」日本生涯教育学会年報第10号. pp.145-162. 1989年
10. 「生涯教育機関としてのカルチャーセンター(2)—『社会教育事業における公共と民間の役割分担論』再考—」東海大学文明研究所紀要第10号. pp.7-22. 1990年
11. 「学校教育と社会教育の連携事業の可能性に関する考察」国立教育研究所研究集録第25号. pp.69-88. 1992年
12. 「市町村における生涯学習体系の制度化に関する実証的考察」『生涯学習体系化と社会教育』日本の社会教育第36集、東洋館出版社、梶田美春と共著、pp.116-124. 1992年10月
13. 「生涯学習支援政策の機能的考察」『地方自治体と生涯学習』日本の社会教育第38集、東洋館出版社、pp.53-68、1994年
14. 「単位取得が可能な学習形態の多様化と生涯学習」日本生涯教育学会年報第16号. pp.65-77. 1995年
15. 「生涯学習社会への移行に関する国際比較研究」澤野由紀子らと共著、日本生涯教育学会論集19. pp.101-108. 1998年
16. 「調査枠組みの構築手法について—分析カテゴリーの工夫—」日本生涯教育学会年報. 20号. pp.87-98. 1999年
17. 「成人の学習能力についての考察—生涯学習社会の文脈から—」日本生涯教育学会年報. 23号. pp.17-37. 2002年
18. 「終章 高度化するメディアリテラシー」国立教育政策研究所紀要第132集. pp.153-168. 2003年

19. 「大学の教育支援コミュニティの創造に向けて—知識経営モデルの活用」大学教育学会誌第28巻第1号. pp.20-23. 2006年
20. 「知識社会の教育システム—教育の工夫と知識の共有化」日本教育経営学会紀要第48号. pp.170-174. 2006年
21. 「共に生きる社会を形成する—学力国際リテラシー調査とキー・コンピテンシー」部落解放研究第170号. pp.2-17. 2006年6月
22. 「成人学習のマタイ効果に関する考察」部落解放研究第175号. pp.62-75. 2007年4月
23. 「生涯学習のためのキー・コンピテンシー」生涯学習・社会教育研究ジャーナル第1号. pp.157-198. 2007年
24. 「知識基盤社会の生涯学習—教育と学習のナレッジ・マネジメントの課題—」日本生涯教育学会年報第31号. pp.97-113. 2010年
25. 「キー・コンピテンシーとしてのリテラシー—各国のナショナルレポートの考察から」日本社会教育学会紀要. No46. pp.147-149. 2010年
26. 「ニュージーランドの教育カリキュラムと学力問題」日本国際教育学会紀要. 第17号. pp.15-29. 2011年
27. 「防災教育の新しい視点—科学的思考力と協同する力、そして物語る力の形成—」九州教育学会研究紀要. 第39巻. pp.7-16. 2012年
28. 「読書活動の成人リテラシーへの影響に関する実証的考察」生涯学習・社会教育研究ジャーナル. 第5号. pp.115-142. 2012年
29. 「文化的コンピテンシーを育てる高校の特別活動と部活動に関する実証的考察」生涯学習・社会教育研究ジャーナル. 第6号. pp.103-118. 2013年
30. 「家庭内読書の教育効果に関する実証的考察」生涯学習・社会教育研究ジャーナル. 第9号. pp.121-139. 2016年
31. 「スマートペンを用いたノートテイキングによる学習効果」福島あずさと共著、神戸学院大学教育開発センタージャーナル第七号、pp.21-33、2016年3月
32. 「読解力の発達を図る学校図書館利用のループリック」. 情報科学技術協会. 情報の科学と技術. No.688. pp.400-405. 2018年
33. 「教員の指導力の自己評価ループリックに関する実験的考察」神戸学院大学教職教育センター. 教職教育センタージャーナル. 第6号. pp.37-55. 2020年
34. 「オンライン学習の教育効果に関する考察」『私立大学研究の到達点』. pp.62-65私学高等教育研究所. 2021年3月
35. 「ウェルビーイングの国際的動向と生涯学習」日本生涯教育学会年報第44号. pp.1-19. 2023年

【主な学術論文（査読なし）】

1. 「郊外都市型カルチャーセンターの事例研究」『社会教育』Vol.44(1)、全日本社会教育連合会、pp.41-53、1989年1月
2. 「カルチャーセンターの動向と課題」『教育と医学』4月号、慶応通信、pp.40-47、1993

年 4 月

3. 「生涯学習時代における資格」『社会教育』通巻579号、全日本社会教育連合会、pp.6-8、1994年
4. 「生涯学習のための都市戦略—OECD 報告の概要」社会教育通巻579号、全日本社会教育連合会、pp.21-25、1995年 2 月
5. 「ボランティア・バンクの活性化に向けて」『社会教育』 9 月号、全日本社会教育連合会、pp.8-12、1995年 9 月
6. 「生涯にわたる発達と家庭の学習」『家庭科』46巻536-537号、全国家庭科教育協会、pp.9-16、1996年 8 月
7. 「ボランティア活動の教育的意義」教育研究10月号第111号、鹿児島県総合教育センター、pp.10-15、1996年10月
8. 「生涯学習における社会的評価と自己評価」月刊社会教育10月号第40巻10号、国土社、pp.35-44、1996年10月
9. 「成人男性学習者の地域社会参加」『月刊公民館』484号、全国公民館連合会、pp.5-10、1997年 9 月
10. 「調査枠組みの構築手法について—分析カテゴリーの工夫」『生涯学習研究の課題を問う』20号、日本生涯教育学会、pp.87-98、1999年11月
11. 「公民館図書室の現状と役割」『月刊公民館』518号、第一法規、pp.4-9、2000年 7 月
12. 「社会教育スタッフの情報活用能力」『社会教育』653号、全日本社会教育連合会、pp.10-13、2000年11月
13. 「生涯学習のための新情報技術—情報リテラシーの学習プログラム」『社会教育』654号、全日本社会教育連合会、pp.10-13、2000年12月
14. 「映像の教育的効果」『学校運営』No474、全国公立学校教頭会、pp.14-17、2001年 1 月
15. 「情報技術を公民館に活かす」『月刊公民館』528号、第一法規、pp.4-10、2001年 5 月
16. 「学習の可能性—自分の価値を引き出す」『更生保護』第52巻第 8 号、日本更生保護協会、pp.6-11、2001年 8 月
17. 「発達段階に応じた体験学習」『兵庫教育』No608、兵庫県立教育研修所、pp.24-29、2001年10月
18. 「学びのプロセス—創造的学習の方法」『全人』No642、玉川大学出版部、pp.14-19、2001年12月
19. 「生涯学習社会の可能性と課題」『夢耕場』No13、大阪生涯職業教育振興協会、pp.12-17、2001年12月
20. 「教科を越えた人生の『鍵となる能力』の学習」『教育展望』第51巻55号、教育調査研究所、pp.30-35、2005年 6 月
21. 「生涯にわたる国語教育と国語学習」月刊国語教育12月号、教育法令、pp.16-19、2006年12月
22. 「『考える力』の定義の国際比較—知識基盤社会の中で」「児童心理」No869、pp.39-44、2007年12月

23. 「諸外国における学習活動支援の制度的工夫」『社会教育』Vol.65(11)、全日本社会教育連合会、pp.18-23、2010年11月
24. 「OECD 国際成人力調査の意義」社会教育68(11)、pp.16-19、2013年11月
25. 「PIAAC (OECD 国際成人力調査) の概要と期待」部落解放 No.686、解放出版社、pp.46-53、2013年12月
26. 「地域社会と学校の文化の共有について：地域文化の継承と学校行事の考察」社会教育69(1)、pp.40-44、2014年1月
27. 「国際成人力調査の結果に見る日本の教育水準の課題と対策」教育展望60(7)、pp.46-50、2014年
28. 「成人力と生涯学習振興：国際的潮流のなかで」社会教育70(6)、pp.26-32、2015年6月
29. 「青年の読書活動—生涯学習の視点から」『社会教育』Vol.71(11)、26-34、2016年11月
30. 「読解力の系統的発達を図る学校図書館活用プログラムに関する研究」人文学部紀要(40)..
pp.49-62、2020年3月
31. 「生涯学習のためのリテラシー」『社会教育』No.766、pp.12-23、全日本社会教育連合会、2021年6月
32. 「大学図書館のイノベーション5つの戦略」『私学経営』No.559、pp.32-42、私学経営研究会、2021年9月
33. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第1回変貌する世界の大学図書館ネットワーク」『私学経営』No.563、pp.49-58、私学経営研究会、2022年1月
34. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第2回オックスフォード大学の図書館」『私学経営』No.564、pp.60-67、私学経営研究会、2022年2月
35. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第3回ケンブリッジ大学図書館」『私学経営』No.566、pp.46-55、私学経営研究会、2022年4月
36. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第4回マンチェスター大学の図書館」『私学経営』No.567、pp.38-46、私学経営研究会、2022年5月
37. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第5回ソルボンヌ大学の図書館—オープンサイエンスへの挑戦」『私学経営』No.568、pp.28-35、私学経営研究会、2022年6月
38. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第6回MITの大学図書館—学士課程の研究を支える専門司書」『私学経営』No.570、pp.40-48、私学経営研究会、2022年8月
39. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第7回ブリティッシュ大学の図書館—変容的学習の実践」『私学経営』No.571、pp.43-50、私学経営研究会、2022年9月
40. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第8回図書館のデジタルシフト—ユニバーシティカレッジロンドン」『私学経営』No.572、pp.54-61、私学経営研究会、2022年10月
41. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第9回スタンフォード大学の図書館—

- 図書館の物語』『私学経営』No.573. pp.45-53. 私学経営研究会. 2022年11月
42. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第10回シェフィールド大学の図書館—総合的なコンテンツ戦略」『私学経営』No.574. pp.21-28. 私学経営研究会. 2022年12月
43. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第11回ハーバード大学の図書館—知のコミュニティ」『私学経営』No.575. pp.33-41. 私学経営研究会. 2023年1月
44. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第12回ワシントン大学の図書館—図書館とキャリアサービス」『私学経営』No.576. pp.33-39. 私学経営研究会. 2023年2月
45. 「大学図書館のマネジメント世界の大学に学ぶ 第13回世界の大学図書館—知識の保存から創造と普及へ—」『私学経営』No.577. pp.24-32. 私学経営研究会. 2023年3月

【雑誌論文その他】

1. 図書紹介 フェルナン・ブローデル「物質文明・経済・資本主義15～18世紀—日常性の構造（1、2）」『文明』47号、東海大学文明研究所、pp.99-106、1986年3月
2. 図書紹介 ピエール・ブルデュー「ディスタクシオン—趣味判断の社会的批判」『文明』58号、東海大学文明研究所、pp.62-67、1990年3月
3. 図書紹介「ワープロが社会を変える」『文明』66号、東海大学文明研究所、pp.7-102、1993年3月
4. 「公民館の事業企画のための調査方法」『月刊公民館』422号、第一法規、pp.14-17、1992年7月
5. 「地域の市民への学校開放」『悠』第9巻第10号、ぎょうせい、pp.90-91、1992年9月
6. 「市町村の生涯学習事業」『進ゼミエコール』12月号、日本ドリコム、pp.72-75、1992年12月
7. 「エデュケーティング・シティ—第2回教育都市国際会議の報告①—」『週刊教育資料』No.337、教育公論社、pp.28-29、1993年3月
8. 「エデュケーティング・シティ—第2回教育都市国際会議の報告②—」『週刊教育資料』No.338、教育公論社、pp.28-29、1993年3月
9. 「公民館とカルチャーセンターの相違点」『月刊公民館』5月号、第一法規、pp.38-39、1993年5月
10. 「生涯学習と国際理解」『自治体国際化フォーラム』49巻11月号、自治体国際化協会、pp.6-9、1993年7月
11. 「生涯学習の場としての家庭」家庭科学第6巻第3号、家庭科学研究所、pp.31-36、1994年
12. 「公民館活動の活発化の諸条件」月刊公民館通巻446号、第一法規、pp.5-31、1994年
13. 「生涯学習の概念と施設」公共建築第37巻第143号、公共建築協会、pp.11-14、1994年
14. 「地域の学習センターとしての機能(2)どんなプログラムがあるか」『悠』第11巻第1号、ぎょうせい、pp.82-83、1994年

15. 「高齢化社会における生涯学習と生きがい」『教職員の生涯設計』第11号、教職員生涯福祉財団、1995年1月
16. 「新しい学校像に対応する新指導力とは」学校運営研究 No.433、明治図書、pp.22-25、1995年
17. 「企画書を創る」『月刊公民館』467号、全国公民館連合会、pp.30-34、1996年4月
18. 「生涯学習プラン(1)学習の習慣」月刊シニアプラン 6巻3号58号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.12-15、1996年6月
19. 「イメージによる効果的プレゼンテーション」『社会教育』601号、全日本社会教育連合会、pp.14-19、1996年7月
20. 「生涯学習プラン(2)必要は学習の母」月刊シニアプラン 6巻4号59号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.8-11、1996年7月
21. 「生涯学習プラン(3)旅の教育力」月刊シニアプラン 6巻5号60号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.10-13、1996年9月
22. 「第5回国際成人教育会議」『月刊公民館』473号、全国公民館連合会、pp.40-41、1996年10月
23. 「生涯学習プラン(4)博識と見識」月刊シニアプラン10月号6巻6号61号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.4-7、1996年10月
24. 「ライフスタイル」『月刊公民館』474号、全国公民館連合会、pp.32-35、1996年11月
25. 「生涯学習プラン(5)流行の力」月刊シニアプラン 6巻7号62号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.4-7、1996年11月
26. 「生涯学習プラン(6)人生のテーマ」月刊シニアプラン 6巻8号63号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.8-11、1996年12月
27. 「生涯学習プラン(7)時間の感覚」月刊シニアプラン 6巻9号64号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.10-13、1997年1月
28. 「生涯学習プラン(8)白鳥の歌」月刊シニアプラン 6巻10号65号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.8-11、1997年3月
29. 「生涯学習プラン(9)大地の音」月刊シニアプラン 7巻1号66号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.8-11、1997年4月
30. 「生涯学習プラン(10)心の声」月刊シニアプラン 7巻2号67号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.12-15、1997年5月
31. 「生涯学習プラン(11)自尊心について」月刊シニアプラン 7巻3号68号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.8-11、1997年6月
32. 「生涯学習プラン(12)スタイルに学ぶ」月刊シニアプラン 7巻4号69号、財団法人シニアプラン開発機構、pp.8-11、1997年7月
33. 「生涯学習社会と男女共同参画」『社会教育』614号、全日本社会教育連合会、pp.18-19、1997年8月
34. 「感動を呼ぶ」『月刊公民館』485号、全国公民館連合会、pp.29-31、1997年10月
35. 「マネージメント」『月刊公民館』486号、全国公民館連合会、pp.28-31、1997年11月

36. 「メディア環境の進化と教育」『週間教育資料』570号 4 月、日本教育新聞社、pp.42-43、1998年 4 月
37. 「生涯にわたるメディア・リテラシー（上）」『週間教育資料』575号 5 月、日本教育新聞社、pp.30-31、1998年 5 月
38. 「生涯にわたるメディア・リテラシー（下）」『週間教育資料』577号 5 月、日本教育新聞社、pp.34-35、1998年 5 月
39. 「生涯学習スタッフの養成プログラムの実態に関する国際比較研究」国立教育研究所 広報115号、国立教育研究所、pp.2-3、1998年 7 月
40. 「グローバルな視点からのメディア教育」『週間教育資料』582号 7 月、日本教育新聞社、pp.34-35、1998年 7 月
41. 「メディアを支える社会的基盤」『週間教育資料』586号 8 月、日本教育新聞社、pp.34-35、1998年 8 月
42. 「コンピュータ導入の賛否両論」『週間教育資料』590号 9 月、日本教育新聞社、pp.34-35、1998年 9 月
43. 「パネルディスカッション：心豊かな生涯学習の実現を目指して—これからの視聴覚教育のありかたを考える—」（共著）『視聴覚教育』1998年10月号 vol52、日本視聴覚協会、pp.12-19、1998年10月
44. 「子どもの創造力を育てる学習環境（上）」『週間教育資料』594号10月、日本教育新聞社、pp.34-35、1998年10月
45. 「学習の文化を育てる」『月刊公民館』1998年11月号第498号、第一法規、pp.30-31、1998年11月
46. 「子どもの創造力を育てる学習環境（下）」『週間教育資料』598号11月、日本教育新聞社、pp.34-35、1998年11月
47. 「学習の経験」『放送教育』1998年12月号53巻 9 号、日本放送教育協会、pp.38-41、1998年12月
48. 「職業生活と学習スタイルの変容（上）」『週間教育資料』602号12月、日本教育新聞社、pp.34-35、1998年12月
49. 「人間の関係」『放送教育』53巻10号、日本放送教育協会、pp.44-47、1999年 1 月
50. 「職業生活と学習スタイルの変容（下）」『週間教育資料』606号 1 月、日本教育新聞社、pp.34-35、1999年 1 月
51. 「ユネスコの生涯学習」『社会教育』632号、全日本社会教育連合会、pp.6-10、1999年 2 月
52. 「成人学習と変化する労働の世界」『社会教育』632号、全日本社会教育連合会、pp.20、1999年 2 月
53. 「成人学習の経済学」『社会教育』632号、全日本社会教育連合会、pp.30、1999年 2 月
54. 「座談会地域の教育—こんな公民館を作ってほしい—」（共著）『月刊公民館』第501号、第一法規、pp.4-27、1999年 2 月
55. 「男女共同参画のためのメディア教育」『週間教育資料』610号 2 月、日本教育新聞社、

pp.34-35、1999年2月

56. 「新世代の参画学習へ」『月刊公民館』第502号、第一法規、pp.26-27、1999年3月
57. 「ビデオサークル考」『視聴覚教育』vo53、日本視聴覚協会、pp.5-7、1999年3月
58. 「成人のための環境教育」『週間教育資料』616号3月、日本教育新聞社、pp.27-29、1999年3月
59. 「人間の限界とメディア活用」『週間教育資料』614号3月、日本教育新聞社、pp.34-35、1999年3月
60. 「公民館のホームページを作ろう」『月刊公民館』510号、第一法規、pp.30-31、1999年11月
61. 「生涯学習社会におけるメディア・リテラシー」『教育と情報』No.502、第一法規、pp.48-51、2000年1月
62. 「『ケルン憲章—生涯学習の目的と希望』を読む」『社会教育』643号、全日本社会教育連合会、pp.12-14、2000年1月
63. 「ミュージー音楽の心と生涯学習の原則」『音楽文化の創造』第16号、音楽文化創造、pp.66-69、2000年3月
64. 「感情のテクノロジー（上）」『放送教育』No.627、日本放送教育協会、pp.48-51、2000年6月
65. 「感情のテクノロジー（下）」『放送教育』No.628、日本放送教育協会、pp.40-43、2000年7月
66. 「自己表現の工夫」『学びの広場』第7号、長崎県民大学、pp.1-2、2000年12月
67. 「エンパワーメント—女性への支援」『月刊公民館』527号、第一法規、pp.28-29、2001年4月
68. 「ITに挑戦」『月刊公民館』530号、第一法規、pp.25-28、2001年7月
69. 「生涯学習の動向」『人文学と情報処理』vol.36、勉誠出版、pp.113-115、2001年9月
70. 「生涯学習音楽指導員に期待されるもの—指導者のスタンスについて」『音楽文化の創造』第24号、音楽文化創造、pp.26-27、2002年3月
71. 「学びの扉 『まねる』は自然の本能」日本経済新聞夕刊、2002年11月1日
72. 「学びの扉 誰でもともせる心の灯」日本経済新聞夕刊、2002年11月29日
73. 「学びの扉 自分史語る冒険いかが」日本経済新聞夕刊10面、2002年12月27日
74. 「学びの扉 相手に関心、深まる理解」日本経済新聞夕刊14面、2003年1月31日
75. 「学びの扉 マイペースで丁寧な人生」日本経済新聞夕刊14面、2003年2月28日
76. 「学びの扉 音楽の喜び分かち合う」日本経済新聞夕刊10面、2003年4月4日
77. 「学びの扉 学び続ける秘訣」日本経済新聞夕刊10面、2003年5月2日
78. 「学びの扉 最善の選択とは」日本経済新聞夕刊14面、2003年5月30日
79. 「学びの扉 地図のない世界」日本経済新聞夕刊14面、2003年6月27日
80. 「学びの扉 虎ファンの忸怩たる思い」日本経済新聞夕刊10面、2003年7月25日
81. 「学びの扉 ちょっとした工夫」日本経済新聞夕刊10面、2003年8月22日
82. 「学びの扉 学びを支える人のぬくもり」日本経済新聞夕刊10面、2003年9月19日

83. 「社会教育専門ゼミナール①生涯学習の意義」『社会教育』第58巻4月号、全日本社会教育連合会、pp.38-39、2003年4月
84. 「生涯学習センターへの提言」『社会教育』、全日本社会教育連合会、pp.10-13、2003年9月
85. 「社会教育専門ゼミナール⑨プレゼンテーション」『社会教育』第59巻10月号、全日本社会教育連合会、pp.76-77、2004年10月
86. 「生涯にわたる読書の楽しみ」『社会教育』710号、全日本社会教育連合会、pp.56-57、2005年8月
87. 「生涯にわたる健康な習慣づくりのために」社会教育、全日本社会教育連合会、pp.28-31、2006年6月
88. 「「キー・コンピテンシーからの教員評価」」学校マネジメント、明治図書、pp.10-12、2008年12月
89. 「社会の形成者に必要なキー・コンピテンシー」社会科教育46巻1号、明治図書、pp.98、2009年1月
90. 「キー・コンピテンシーの国際的動向(1)」文部科学教育通信 No214、ジヤース教育新社、pp.28-29、2009年
91. 「キー・コンピテンシーの国際的動向(2)」文部科学教育通信 No215、ジヤース教育新社、pp.26-27、2009年
92. 「キー・コンピテンシーの国際的動向(3)」文部科学教育通信 No216、ジヤース教育新社、pp.20-21、2009年
93. 「キー・コンピテンシーの国際的動向(4)」文部科学教育通信 No217、ジヤース教育新社、pp.20-21、2009年
94. 「知識基盤社会」月刊『指導と評価』Vol.56、pp.2-3、2010年9月
95. 「生涯にわたる読書活動—読書への関わり」文部科学教育通信 No256、ジヤース教育新社、pp.18-19、2010年11月
96. 「科学的根拠に基づく思考力（教師の人間力—キー・コンピテンシーを考える）」『学校マネジメント』Vol.49(1)、明治図書、pp.64-67、2010年1月
97. 「教育技術の向上をめざして（教師の人間力—キー・コンピテンシーを考える）」『学校マネジメント』Vol.49(2)、明治図書、pp.64-67、2010年2月
98. 「熟練教師の人間力（教師の人間力—キー・コンピテンシーを考える）」『学校マネジメント』Vol.49(3)、明治図書、pp.64-67、2010年3月
99. 「新『社会教育論者の群像』—社会教育を支えた人たち（第8回）駒田錦一（1907～2002）—青年教育の実践と研究、国際比較研究の先達者」社会教育66(4)、pp.42-45、2011年4月
100. 「新『社会教育論者の群像』—社会教育を支えた人たち（第11回）原田種雄（1912～2007）—国際比較研究と教科書研究の先駆者」社会教育66(10)、pp.90-93、2011年10月
101. 「音楽文化活動を通じた地域社会の「きずな」作り」季刊 CMCvol.60、(財)音楽文化創造、pp.45-46、2011年4月

102. 「eポートフォリオの可能性」文部科学教育通信 No274、ジァース教育新社、pp.22-23、2011年8月
103. 「eポートフォリオの目的と種類」文部科学教育通信 No275、ジァース教育新社、pp.22-23、2011年9月
104. 「多様なデザインの可能性」文部科学教育通信 No276、ジァース教育新社、pp.22-23、2011年9月
105. 「ウィスコンシン大学のEPCS」文部科学教育通信 No277、ジァース教育新社、pp.22-23、2011年10月
106. 「教員スタンダード取得の仕組み」文部科学教育通信 No278、ジァース教育新社、pp.22-23、2011年10月
107. 「資質向上に効果的なeポートフォリオ」文部科学教育通信 No279、ジァース教育新社、pp.22-23、2011年11月
108. 「OECD『成人力調査の概要』(1)」社教情報68、全国社会教育委員連合、pp.57-59、2013年2月
109. 「eポートフォリオの定義再考」文部科学教育通信 No313、ジァース教育新社、pp.16-17、2013年4月
110. 「知識のフローツールとしてのeポートフォリオ」文部科学教育通信 No314、ジァース教育新社、pp.16-17、2013年4月
111. 「大学と社会の新たな学習環境の形成に向けて」文部科学教育通信 No315、ジァース教育新社、pp.16-17、2013年5月
112. 「大学と社会の新たな学習環境の形成に向けて」文部科学教育通信 No317、ジァース教育新社、pp.16-17、2013年6月
113. 「学習支援の7つの原理」文部科学教育通信 No.318、ジァース教育新社、pp.16-17、2013年6月
114. 「日本の学校外教育の役割と評価」教育展望 Vol.59(5)、教育調査研究所、pp.28-32、2013年6月
115. 「大学の広報・広聴事業」文部科学教育通信 No319、ジァース教育新社、pp.16-17、2013年7月
116. 「OECD『成人力』調査の概要（その1）」社教情報68、全国社会教育委員連合、pp.57-59、2013年2月
117. 「OECD『成人力』調査の概要（その2）」社教情報69、全国社会教育委員連合、pp.58-60、2013年9月
118. 「OECD『成人力』調査の概要（その3）」社教情報70、全国社会教育委員連合、pp.21-23、2014年2月
119. 「学習の習慣—学修支援の基本的前提」文部科学教育通信 No.348、ジァース教育新社、pp.16-17、2014年10月
120. 「学習の習慣—学修支援の基本的前提として」文部科学教育通信 No.348、pp.16-17、ジァース教育新社、2014年9月

121. 「学習支援の教育方法—ノートテイキング(1)」文部科学教育通信 No.349, pp.16-17, ジアース教育新社, 2014年10月
122. 「学習支援の教育方法—ノートテイキング(2)」文部科学教育通信 No.350, pp.16-17, ジアース教育新社, 2014年10月
123. 「教職課程へのeポートフォリオの導入実験」文部科学教育通信 No.364, pp.26-27, ジアース教育新社, 2015年5月
124. 「LMSとモード2への移行の中で」文部科学教育通信 No.365, pp.18-19, ジアース教育新社, 2015年6月
125. 「自然体験活動指導者の資格取得」文部科学教育通信 No.373, pp.18-19, ジアース教育新社, 2015年10月
126. 「コミュニティ・ラーニング・キャンパス(1)」文部科学教育通信 No.374, pp.18-19, ジアース教育新社, 2015年10月
127. 「コミュニティ・ラーニング・キャンパス(2)」文部科学教育通信 No.375, pp.32-33, ジアース教育新社, 2015年11月
128. 「コミュニティ・ラーニング・キャンパス(3)」文部科学教育通信 No.376, pp.18-19, ジアース教育新社, 2015年11月
129. 「コミュニティ・ラーニング・キャンパス(4)」文部科学教育通信 No.377, pp.28-29, ジアース教育新社, 2015年12月
130. 「学習支援の教育方法第71回 大学生の基礎力(1)」文部科学教育通信 No.393, pp.26-27, ジアース教育新社, 2016年8月
131. 「学習支援の教育方法第72回 大学生の基礎力(2)」文部科学教育通信 No.394, pp.24-25, ジアース教育新社, 2016年8月
132. 「学習支援の教育方法第74回 大学生の基礎力(4)」文部科学教育通信 No.396, pp.24-25, ジアース教育新社, 2016年9月
133. 「グローバル・コンピテンシーの育成—高大接続の視点から—」アルカディア学報599、教育学術新聞2662、2016年10月
134. 「学習支援の教育方法第84回 eポートフォリオによる学習マネジメント(1)」文部科学教育通信 No.407, pp.30-31, 2017年3月
135. 「学習支援の教育方法第85回 eポートフォリオによる学習マネジメント(2)」文部科学教育通信 No.408, pp.12-13, 2017年3月
136. 「学習支援の教育方法(第94回)教員のコンピテンシー向上に向けて」文部科学教育通信 No.419, pp.14-15, ジアース教育新社, 2017年9月
137. 「世界の大学に見る学習(第1回)学習支援の国際的展望に向けて」文部科学教育通信 No.437, pp.20-21, ジアース教育新社, 2018年5月
138. 「世界の大学に見る学習(第2回)大学の未来とシナリオ」文部科学教育通信 No.438, pp.20-21, ジアース教育新社, 2018年6月
139. 「世界の大学に見る学習(第3回)世界の大学ネットワーク」文部科学教育通信 No.439, pp.14-15, ジアース教育新社, 2018年7月

140. 「世界の大学に見る学習（第4回）ミシガン大学のラーニング・アナリティクス」文部科学教育通信 No440, pp.14-15, ジアース教育新社, 2018年7月
141. 「世界の大学に見る学習（第5回）気候変動教育への取り組み」文部科学教育通信 No441, pp.14-15, ジアース教育新社, 2018年8月
142. 「世界の大学に見る学習（第6回）オックスフォード大学の教育的伝統」文部科学教育通信 No442, pp.30-31, ジアース教育新社, 2018年8月
143. 「世界の大学に見る学習（第7回）オックスフォード大学の図書館」文部科学教育通信 No443, pp.20-21, ジアース教育新社, 2018年9月
144. 「世界の大学に見る学習（第8回）ケンブリッジ大学の科学的伝統」文部科学教育通信 No444, pp.20-21, ジアース教育新社, 2018年9月
145. 「世界の大学に見る学習（第14回）大学を越える社会的認定システム」文部科学教育通信 No450, pp.20-21, ジアース教育新社, 2018年12月
146. 「世界の大学に見る学習（第23回）大人数授業とアクティブラーニング」文部科学教育通信 No461, pp.24-25, ジアース教育新社, 2019年6月
147. 「世界の大学に見る学習（第24回）大人数授業とアクティブラーニング（続）」文部科学教育通信 No462, pp.34-35, ジアース教育新社, 2019年6月
148. 「世界の大学に見る学習（第27回）ラーニング・スペース(1)」文部科学教育通信 No465, pp.32-33, ジアース教育新社, 2019年8月
149. 「世界の大学に見る学習（第28回）ラーニング・スペース(2)」文部科学教育通信 No466, pp.24-25, ジアース教育新社, 2019年8月
150. 「離学率減少と修学・就労支援へ 神戸学院大で『学生の未来センター』開設」アルカディア学報664、教育学術新聞2796、2020年2月
151. 「世界の大学に見る学習第41回サウサンプトン大学のヘルス・リテラシー」文部科学教育通信 No.481, pp.20-22, ジアース教育新社, 2020年4月
152. 「世界の大学に見る学習第42回スタンフォード大学のdスクール」文部科学教育通信 No.482, pp.18-19, ジアース教育新社, 2020年4月
153. 「大学図書館のイノベーションー変わりゆく読書と学習の環境」教育学術新聞2806, pp.3, 2020年5月
154. 「世界の大学に見る学習第43回学習のユニバーサル・デザイン・スタジオ スタンフォード大学」文部科学教育通信 No.483, pp.38-39, ジアース教育新社, 2020年5月
155. 「世界の大学に見る学習第44回 UBC のオンラインコース」文部科学教育通信 No.485, pp.36-37, ジアース教育新社, 2020年6月
156. 「世界の大学に見る学習第45回ニューヨーク大学芸術学部」文部科学教育通信 No.486, pp.28-29, ジアース教育新社, 2020年6月
157. 「世界の大学に見る学習第46回ニューヨーク州立大学」文部科学教育通信 No.487, pp.22-23, ジアース教育新社, 2020年7月
158. 「世界の大学に見る学習第47回オンライン教育支援システム(1)」文部科学教育通信 No.488, pp.28-29, ジアース教育新社, 2020年7月

159. 「世界の大学に見る学習第48回オンライン教育支援システム(2)」文部科学教育通信 No. 489, pp.28-29, ジアース教育新社, 2020年 8 月
160. 「なぜ『学び直し』？」日本労働研究雑誌 No.721, pp.1, 2020年 8 月
161. 「世界の大学に見る学習第49回オンライン教育支援システム(3)」文部科学教育通信 No. 491, pp.24-25, ジアース教育新社, 2020年 9 月
162. 「世界の大学に見る学習第50回オンライン教育支援システム(4)」文部科学教育通信 No. 492, pp.24-25, ジアース教育新社, 2020年 9 月
163. 「世界の大学に見る学習第51回オンライン教育支援システム(5)」文部科学教育通信 No. 493, pp.26-27, ジアース教育新社, 2020年10月
164. 「世界の大学に見る学習第52回オンライン教育支援システム(6)オープン教育リソース」文部科学教育通信 No.494, pp.30-31, ジアース教育新社, 2020年10月
165. 「世界の大学に見る学習第53回ジョージア大学の経験学習」文部科学教育通信 No.496, pp.28-29, ジアース教育新社, 2020年11月
166. 「世界の大学に見る学習第54回グリニッジ大学のゲーミフィケーション」文部科学教育通信 No.497, pp.26-27, ジアース教育新社, 2020年12月
167. 「世界の大学に見る学習第55回オールボー大学の問題解決学習」文部科学教育通信 No. 498, pp.26-27, ジアース教育新社, 2020年12月
168. 「世界の大学に見る学習第56回問題解決学習を担うヨーロッパ大学コンソーシアム」文部科学教育通信 No.499, pp.30-31, ジアース教育新社, 2021年 1 月
169. 「大学図書館の挑戦—学術と地域つなぎ知と文化創出の場へ」アルカディア学報720, 教育学術新聞2835, pp.2, 2021年 3 月
170. 「世界の大学に見る学習第64回バルセロナ自治大学」文部科学教育通信 No.507, pp.20-21, ジアース教育新社, 2021年 5 月
171. 「世界の大学に見る学習第65回ヘルシンキ大学における持続可能性学習の必修化」文部科学教育通信 No.508, pp.18-19, ジアース教育新社, 2021年 5 月
172. 「世界の大学に見る学習第66回マッコーリー大学—教員のための AI 教育コース」文部科学教育通信 No.509, pp.18-19, ジアース教育新社, 2021年 6 月
173. 「世界の大学に見る学習第67回オークランド大学—大学内企業の発展」文部科学教育通信 No.510, pp.30-31, ジアース教育新社, 2021年 6 月
174. 「世界の大学に見る学習第68回トロント大学—多元的知性の学習」文部科学教育通信 No.511, pp.30-31, ジアース教育新社, 2021年 7 月
175. 「世界の大学に見る学習第69回アールト大学の創造的持続可能性プログラム」文部科学教育通信 No.512, pp.28-29, ジアース教育新社, 2021年 7 月
176. 「世界の大学に見る学習第70回イエール大学—情動的知性の学習」文部科学教育通信 No.513, pp.26-27, ジアース教育新社, 2021年 8 月
177. 「世界の大学に見る学習第71回イエール大学—情動的知性の学習(2)」文部科学教育通信 No.514, pp.26-27, ジアース教育新社, 2021年 8 月
178. 「世界の大学に見る学習第72回アリゾナ大学—学習イニシャティブ」文部科学教育通

- 信 No.516, pp.26-27, ジアース教育新社, 2021年9月
179. 「世界の大学に見る学習第73回アリゾナ大学—学習イニシャティブ（続）」文部科学教育通信 No.517, pp.26-27, ジアース教育新社, 2021年10月
180. 「世界の大学に見る学習第82回海洋学を学ぶ—ノルウェー ベルゲン大学」文部科学教育通信 No.526, pp.36-37, ジアース教育新社, 2022年2月
181. 「世界の大学に見る学習第83回世界の大洋で学ぶ旅—ノルウェー ベルゲン大学」文部科学教育通信 No.527, pp.36-37, ジアース教育新社, 2022年3月
182. 「世界の大学に見る学習第84回星から学ぶ ハーバード大学天体物理学センター」文部科学教育通信 No.528, pp.42-44, ジアース教育新社, 2022年3月
183. 「世界の大学に見る学習第85回進化する繊維を学ぶ スウェーデン ボラス大学」文部科学教育通信 No.529, pp.24-25, ジアース教育新社, 2022年3月
184. 「世界の大学に見る学習第86回スイス チューリッヒ工科大学（地理を学ぶ）」文部科学教育通信 No.530, pp.28-29, ジアース教育新社, 2022年4月
185. 「世界の大学に見る学習第87回コミュニケーションの未来 アムステルダム大学」文部科学教育通信 No.531, pp.28-29, ジアース教育新社, 2022年5月
186. 「世界の大学に見る学習第88回オープン・カリキュラム ブラウン大学」文部科学教育通信 No.532, pp.30-31, ジアース教育新社, 2022年5月
187. 「世界の大学に見る学習第89回持続可能な大学 サセックス大学」文部科学教育通信 No.533, pp.30-31, ジアース教育新社, 2022年6月
188. 「世界の大学に見る学習第90回生物多様性を学ぶ ワーヘニンゲン大学・研究センター」文部科学教育通信 No.534, pp.34-35, ジアース教育新社, 2022年6月
189. 「世界の大学に見る学習第91回高齢者に優しいダブリンシティ大学」文部科学教育通信 No.535, pp.22-23, ジアース教育新社, 2022年7月
190. 「世界の大学に見る学習第92回K Uルーヴェンの革新的戦略」文部科学教育通信 No.536, pp.24-25, ジアース教育新社, 2022年7月
191. 「世界の大学に見る学習第93回教育の質の文化 K Uルーヴェン」文部科学教育通信 No.537, pp.24-25, ジアース教育新社, 2022年8月
192. 「世界の大学に見る学習第94回フィードバックリテラシーの向上 K Uルーヴェン」文部科学教育通信 No.538, pp.24-25, ジアース教育新社, 2022年8月
193. 「世界の大学に見る学習第95回学術的教授・学習センター ユトレヒト大学」文部科学教育通信 No.539, pp.24-25, ジアース教育新社, 2022年9月
194. 「世界の大学に見る学習第96回起業家センター ユトレヒト大学」文部科学教育通信 No.540, pp.28-29, ジアース教育新社, 2022年9月
195. 「世界の大学に見る学習第97回量子コンピュータの教育 ベルフト大学」文部科学教育通信 No.541, pp.28-29, ジアース教育新社, 2022年10月
196. 「世界の大学に見る学習第98回国立ロボタリウム ヘリオットワット大学」文部科学教育通信 No.542, pp.28-29, ジアース教育新社, 2022年10月
197. 「世界の大学に見る学習第99回テクノロジーの未来へ エディンバラ大学」文部科学

- 教育通信 No.543, pp.30-31, ジアース教育新社, 2022年11月
198. 「世界の大学に見る学習第100回こころと手 マサチューセッツ工科大学」文部科学教育通信 No.544, pp.30-31, ジアース教育新社, 2022年11月
199. 「世界の大学に見る学習第101回地域社会から国際社会へ マサチューセッツ工科大学」文部科学教育通信 No.545, pp.24-25, ジアース教育新社, 2022年12月
200. 「世界の大学に見る学習第102回 MIT とハーバード大学」文部科学教育通信 No.546, pp.22-23, ジアース教育新社, 2022年12月
201. 「世界の大学に見る学習第103回シンガポール国立大学」文部科学教育通信 No.547, pp.24-25, ジアース教育新社, 2023年1月
202. 「世界の大学に見る学習第104回ウェルビーイングのための共感と回復」文部科学教育通信 No.548, pp.20-21, ジアース教育新社, 2023年1月
203. 「世界の大学に見る学習第109回広域学習システムの発展に向けて」文部科学教育通信 No.553, pp.18-19, ジアース教育新社, 2023年4月
204. 「世界の大学に見る学習第110回生涯学習の態度形成における教育者の役割」文部科学教育通信 No.554, pp.20-21, ジアース教育新社, 2024年4月
205. 「世界の教育リーダー第1回教育におけるリーダーシップ」文部科学教育通信 No.555, pp.18-19, ジアース教育新社, 2023年5月
206. 「世界の教育リーダー第2回ジェローム・ブルーナー(1)」文部科学教育通信 No.556, pp.14-15, ジアース教育新社, 2023年5月
207. 「世界の教育リーダー第3回ジェローム・ブルーナー(2)」文部科学教育通信 No.557, pp.12-13, ジアース教育新社, 2023年6月
208. 「世界の教育リーダー第4回ジェローム・ブルーナー(3)」文部科学教育通信 No.558, pp.14-15, ジアース教育新社, 2023年6月
209. 「世界の教育リーダー第8回学習する組織(1) ピーター・センゲ」文部科学教育通信 No.562, pp.12-13, ジアース教育新社, 2023年8月
210. 「世界の教育リーダー第9回学習する組織(2) ピーター・センゲ」文部科学教育通信 No.563, pp.10-11, ジアース教育新社, 2023年9月
211. 「世界の教育リーダー第10回学習する組織(3) ピーター・センゲ」文部科学教育通信 No.564, pp.10-11, ジアース教育新社, 2023年9月
212. 「世界の教育リーダー第11回生涯学習の先駆者—ポール・ラングラン(1)」文部科学教育通信 No.565, pp.10-11, ジアース教育新社, 2023年10月
213. 「世界の教育リーダー第12回生涯学習の先駆者—ポール・ラングラン(2)」文部科学教育通信 No.566, pp.12-13, ジアース教育新社, 2023年10月
214. 「世界の教育リーダー第13回生涯学習の先駆者—ポール・ラングラン(3)」文部科学教育通信 No.567, pp.10-11, ジアース教育新社, 2023年11月
215. 「大学図書館のキャリア学習支援—スムーズな学内支援に向けて」アルカディア学報 720, 教育学術新聞2946, pp.2, 2023年11月
216. 「新刊紹介 新居田久美子著『ライフソリューションをはじめよう わたしを育てる

キャリアデザイン』』『H & S 人間文化』、2023年12月

217. 「第3章地域社会活動・生涯学習 I 地域社会とのかかわり II 地域社会に関わるポイント」『教職員の生涯生活設計ガイドブック ライフマップー実りある明日を作るために』（令和5年版 pp.31-35, 一般財団法人教職員生涯福祉財団、2024年2月
218. 「地域社会では ①さまざまな地域社会活動 ②地域社会活動への参加のポイント」『教職員の生涯生活設計ガイドブック セカンドライフマップー豊かで明るい退職後のために』（令和5年版 pp.18-20, 一般財団法人教職員生涯福祉財団、2024年2月

生涯学習研究の回想と展開

立田 慶裕

私は、大阪大学が1972年に開設した人間科学部の第一期生として入学した。卒業後は大学院に進学し、助手を勤め、東海大学に講師、助教授として研究活動、教育活動に従事し、その後、国立教育研究所に新たに設置された生涯学習研究部に勤務、文部科学省の改組により国立教育政策研究所となった期間を経て、還暦を契機に神戸学院大学に就職した。ほぼ半世紀にわたる教育と研究活動の一貫したテーマが生涯学習であった。本稿では、その研究テーマを巡ってこれまでどのような問題を追求してきたかを、大学退職にあたって振り返ってみたい。

研究成果としてどのような評価を受けたかは別にして、私が非常に面白いと考えたテーマは、極めて多様である。もっとも効果的な学習と研究の方法は、集中と分散をくりかえすことだが、私の場合は集中というより分散的な傾向が強く、その点が最も反省すべき点である。ただ、自分自身としては、分散と統合を繰り返す中で、いろいろ新しい研究のアイデアが浮かんで取り組み、研究成果として刊行でき、大変楽しい研究生活であった。

1. 大阪大学人間科学部の学部・大学院時代（1972～1979年）

1972年、大阪大学に人間科学部が全国で初めて開設された。一期生として入学した私たちは人間科学研究会を結成し、教育学（形成系）、社会学（社会系）、心理学（行動系）の3つの領域にわたる学際的な学問自体について、フラットな姿勢で教授たちと議論する機会を得た。三年次までは石橋キャンパスの文学部に間借りしていたが、四年次には、万博の跡地に建てられた吹田キャンパスの新しい学部棟で学ぶことができた。三年次に三つの系のいずれかを選択することとなり、形成系を選択した。一学年百人のうち、形成系を選択した男性は十人に満たず、文学部の教育学研究室にいた大学院生の人々と急速に親しくなった。長尾彰、川上婦志子、池田寛、米川英樹さんらそのほとんどが研究者を目指し、実際にその後大阪大学、大阪教育大学や神奈川大学で研究職に就かれた。指導教官だった教育社会学の二関隆美教授や麻生誠助教授や名越清家助手からも教育史や統計学などの調査研究法を学び、学問の面白さに惹かれていった。

卒業論文には、麻生助教授のエリート論の文脈で中小企業経営者の補充類型をテーマとして取り上げたが、その統計的根拠として大阪府の中小企業経営者を対象とした調査データの分析・考察を行った。1970年代の社会調査、特に統計的な調査を行うためには、コンピュータの基礎知識が必要であり、収集した質問紙のデータをパンチカードに打ち込み、プログラムを作って大型計算機で処理するのが普通であった。SPSS という統計パッケージも大阪大学よりは京都大学の計算機の処理速度が速かったため、京都大学によく通った。中小企業経営者の歴史的な文脈を追うために、江戸時代から明治にかけての商家の歴史につ

いての文献は大学図書館で漁った。

指導教官の勧めもあり大学院を受験したが、最初の試験は卒業後の6月という変則的なもので、辞書なしでフランス語と英語の読解があったため落ちて一年間研究生として過ごし翌年大学院へ進学した。人間科学部研究科の大学院生は極めて少なかった。そのため、大学院では二年間主に社会学の専門を学んだが、『〈子供〉の誕生』で有名な杉山光信先生やブルデューの再生産論の統計的指導をしてくださった西田春彦先生からマンツーマン指導を受けた。杉山先生からは、生活文化の背景にある人間形成の深い意味、西田先生からは、簡単に思える「平均」の持つ意味や潜在構造分析、数量化理論による統計的データから読み取る社会構造の動態など統計的分析と考察の方法を指導していただいた。大学院では、大阪府に加えて石川県のデータを追加して、数量化分析を行うことで精一杯であったが、その成果は学部紀要にまとめることができた（山本慶裕、1982）。

2. 大阪大学人間科学部助手の時代（1980～1984年）

修士課程修了間際に社会教育論講座の助手になる話をいただいたが、手続きが遅れたために一年間の博士課程を経ることとなった。しかし実際には、助手候補として、社会教育論講座に研究室をいただき、元木健教授、友田泰正助教授の下で翌年就職口を得た。助手として採用された理由は、私が十年以上ボーイスカウト活動を行い、社会教育に適していること、そして統計的分析のスキルをもつことから、講座で必要とされる多くの社会調査を担当できることにあったと推察される。実際、わずか五年間の勤務であったが、毎年の調査活動とともに、社会教育主事講習の準備や実施に明け暮れることとなった。

大阪大学が実施していた社会教育主事講習については、その準備から実施にいたるまでの仕事や演習を通じて、社会教育の現場をよく知る機会となった。関西の多くの社会教育主事補の方々と知り合いになれただけでなく、関西の社会教育研究者との交流も深まった。特に、京都大学教授であった上杉孝實先生には、そのお人柄も含めて国際的な視点から成人教育を見る眼を養わせていただいた。

助手時代に関わった主な調査は、カルチャーセンターという民間教育事業調査、図書館調査、そして市民意識調査である。カルチャーセンター調査では、大阪朝日カルチャーセンター、千里教室、京都、神戸の調査を行った。それぞれに受講者カードをデータ化し、アンケート調査を作成の上、実施、分析、報告書を作成した。図書館は、大阪府の松原市民図書館、千里図書館を調査した。市民意識調査では、大阪市、尼崎市を対象とした。友田助教授のもと、大学院生だった堀薫夫さんや森実さん、そして学部生の協力を得た調査チームとして、科研費の申請、予算の確保、組み方、使い方、会議、データ分析から報告書作成まで、この助手の経験でほぼ研究者としての知識やスキルを習得することができた。また、社会教育の行政の人たちへの協力も行った。大阪府の文化情報センター設立に関わり、大阪市の社会教育主事の研修にも協力した。

特に厳しかったのが友田助教授の指導である。友田助教授は広島大学で新堀道也の薫陶を受け、シカゴ大学帰りの英語に堪能な先生だったが、カミングスの『ニッポンの学校』の翻訳の指導や報告書の文章の書き方だけでなく、統計的な分析法についても多くの知見

をくださった。図書館や読書に関する問題意識は、ほぼこの先生から受け継いでいる。

毎年2冊以上の報告書を刊行する一方で、研究者としての業績を得るために学部紀要論文を2本書いた。そのうち、松原市民図書館のアクセシビリティに関する研究では、1973年に発表された赤池情報量基準（AIC）を用いた図書館利用モデルの分析と考察を行ったが、この研究からは図書館の市民利用の謎を深く残すことになってしまった（山本、1985）。

この助手時代にも、人間科学部の教育学、心理学、社会学、人類学と各分野で一流の研究者にお会いできた。特に教育学では隣の教育技術論研究室の扇谷尚先生、水越敏行先生、梶田叡一先生、寺西和子助手、教育心理学の中西信男先生、教育制度論の金子照基先生、安部彰先生など、今思い出せばそれぞれの先生からもっと多くのことを学ぶ機会があったのにと悔やまれる。人間科学部の先生方のご助力を得て、1985年東海大学文明研究所へ移った。

3. 東海大学文明研究所での教育と研究（1985～1991年）

神奈川県平塚市にある東海大学湘南校舎の文明研究所は、創立者の松前重義が肝いりで組織し「文明」の追求という理念のもとで学際的な分野の研究者・教育者が集められていた。教養学部にあたる科目とともに現代文明論を担当することになっていた。大学には講師として採用されたが、三年後には助教授に昇進した。その間、大学近くの職員宿舎から勤務していたので、通勤時間は徒歩5分という便利さであった。担当科目は社会学で、研究室は経済学、法学の専門家と相部屋だったが、その人たち以外にも生物学、心理学、芸術論、天文学など多くの同僚と公私にわたって交流できた。

大学には出版会もあり、編集者から社会学の教科書作成を依頼されて、初めての本作りに取り組むことができた。就任した年に、アナール学派のフェルナン・ブローデルの『日常性の構造 1—物質文明・経済・資本主義—15—18世紀』について、雑誌『文明』の書評を依頼された。秋に刊行された第二巻を含めて総9百頁の大著であった。書評の書き方がわからなかったが、内容が非常に面白く、夏休みのほとんどはこの本の精読に費やしていた。

助手時代の研究関心をそのまま継続していたので、大阪大学の直井優先生からの依頼で大企業経営者の実証的研究を当時東京大学の大学院生だった高瀬武典さんと大企業経営者の地位達成過程の実証研究を行い、湘南地域の朝日カルチャーセンター調査やカルチャーセンター協議会の調査研究への協力などを東海大学時代には行った。また、メディア教育研究という点で、大阪大学の教育技術論教授だった水越敏行先生との共同研究の機会も得られるようになった。

研究所の同僚たちとの交際は非常に楽しく、テニスや釣りに勤しんだ。他方、当時の所長玉井治先生から、『価値』という哲学書の共同翻訳を依頼されたが、1991年の締め切り間際に先生が脳梗塞で倒れたことは、大変な衝撃だった。当時、松前総長が亡くなられ、その葬儀後のことであったし、前年に同僚の一人であり、ジョイスをこよなく愛し、ジョン・ヒューストン監督のVHSを貸してくださっていた大村先生を失っていただけに、人の死に続けて直面した。幸い玉井先生の生命は無事だったが、記憶を失われてしまい、本当に生きることの価値を見直すこととなった。

1980年代後半、文部省が生涯学習政策を立ち上げるため、国立教育研究所に生涯学習研究部が設置されることとなった。私は、文部省の生涯学習関連の委員会にも参加しており、麻生先生や友田先生の推薦で大阪大学出身者として社会教育の研究者の候補となり、91年の秋に研究所へ移った。

4. 国立教育政策研究所の研究活動（1991～2013年）

2000年の省庁再編前まで、研究所は国立教育研究所として目黒にあった。東海大学周辺の自然環境が気に入っており、自宅を東海大学の宿舎から近くの家へ引っ越し、その後は2時間かけての通勤を小田急線東海大学前駅や秦野駅から20年以上続けることとなった。

1949年に教育研修所が廃止されて設置されたのが国立教育研究所である。研修所時代からの全国教育研究所連盟の設立案を受けて設置された側面もあるとされており、全国教育研究所連盟の事務局としての役割も受け持っていた。組織も庶務部、研究調査部とともに指導普及部、図書館も有する資料部の4部から構成されていた。

1960年代には4～5の研究部に分かれ、目黒に移転していた。また、すでに国際共同研究としてユネスコ教育研究所が主催するIEA（国際教育到達度評価国際学会）に参加し、数学教育や理科教育の国際調査に参加していた。ユネスコ本部の教育局長経験のあった平塚所長時代の1960～70年代にはさらに、科研費研究や国際共同研究を行う組織として発展し、OECDとの研究協力も行っていた。1989年の改組によって、生涯学習研究部が生まれ、生涯学習体系研究室と社会教育研究室が設置された。

私はこの二つの研究室にさらに新たに設置された生涯学習開発・評価研究室の主任研究官として採用された。最初の肩書きは、国立教育研究所生涯学習研究部生涯学習開発・評価研究室主任研究官という長い肩書きだった。研究室には室長がらず、ロシア教育の専門家、川野辺敏先生が部長であった。研究部として、他の研究部や研究所全体の協力を得ながら、現在の生涯学習の現状と課題を総括することから仕事が始まった。この二十年以上にわたる研究所時代に、研究専門職として多くの研究成果を出せたが、その背景には、国立教育研究所としての全国的研究組織、そして国際研究組織としての環境があった。

1993年4月からは、文部省生涯学習局生涯学習調査官（～1997年3月）を兼務したが、この任務はほぼ筑波大学の山本恒夫先生が代表してくださり、あまり大きな貢献はしていない。この頃の研究者や文部科学省の仕事については、生涯学習研究の先達、故岡本包治先生がいろいろとお世話してくださった。近藤真司氏が編集する月刊『社会教育』の編集委員会や全国公民館連合会の委員に推薦してくださり、本当に目をかけていただいた。近藤さんにはその後何度も論文依頼をいただき、発表の機会をいただいた。

この時代での主な研究を次に整理してみた。研究所の研究は、予算の上では所全体あるいは研究部単位のプロジェクト研究か、科研費を中心とした個人研究で行われている。それ以外にも所全体で取り組まれている特別研究という研究活動がある。

(1) 特別研究「生涯学習化社会の教育計画に関する総合的研究」

就任前の東海大学在職中から、国立教育研究所の特別研究「生涯学習化社会の教育計画

に関する総合的研究」に招聘されて研究活動に関わっていた。生涯学習研究部そのものが生涯学習の現状と課題を把握し、生涯学習政策計画に資することが文部省からの研究課題として課されていたのである。

この研究は、改組後から組織化が図られ、研究所の他の研究部の協力を得て実施された。その成果は、国立教育研究所内生涯学習研究会編『生涯学習の研究—その理論・現状と展望・調査資料』（エムティ出版、1993）として刊行されている。同書は、第1部 生涯学習化社会の現状、第2部 生涯学習化社会の諸問題、第3部 生涯学習化社会の展望、第4部 部局所管学校の現状と課題、第5部 諸外国の生涯学習の5部構成となっており、さらに質問紙調査や事例調査、海外調査の詳しい資料が加えられた。

この報告書とは別に、私は全国の市区町村の社会教育事業をデータベース化して、その事業内容を分類整理する作業を行い、『生涯学習の事業内容と問題点：市区町村の社会教育事業に関する調査より』（1992）をまとめた。社会教育事業の分類は、その後関わった優良公民館事業の分類にも役立てて、データベースの活用から、新たな事業開発の方法を探ろうと試みていた。というのも、改組によって設置された「生涯学習開発・評価研究室」の責任者として、五年毎に研究成果の報告を行うことが義務づけられており、その評価によって研究室の継続が保証されていたからである。したがって、就任当初からできる限りの論文を執筆し、科研費を獲得して、報告書を毎年のように提出するという活動がほぼ十年間続いた。さらに、その研究内容が「開発と評価」であるため、生涯学習に関わる新しいアイデアを生むことが習慣づけられたかもしれない。

(2) ドイツ・ユネスコ教育研究所と各国研究者の交流

1994年4月には生涯学習開発・評価研究室の室長となったが、部下は誰もいないので実質主任研究官から肩書きが変わっただけのようなものだった。国際的な研究や活動の大きな展開が得られたのは、当時ドイツユネスコ研究所の理事だった牧昌美先生から頼まれた理事代理の任務であった。

ドイツのハンブルクにあるユネスコ教育研究所（UNESCO Institute of Education、UIE）は、1952年にドイツ、ハンブルクに設立された教育専門の研究所である。UIEの研究と活動は、特にリテラシーや成人教育に焦点が当てられ、国際成人教育会議を主催し、教育研究やリテラシー開発を中心に教育の国際的な発展に尽くしてきた。同研究所と国立教育研究所の関係は、1962年から開始された国際数学教育調査事業に始まる。その後ユネスコ本部や世界銀行、OECDとの関係も生まれ、1960年代後半からアジア地域の教育調査や研修にも関わり、国際活動は本格化していく。ユネスコ関係では1973年に「フォール報告書」（邦訳『未来への教育』）の翻訳が研究所の多くの研究者の手で行われた。

ユネスコの教育に関わる研究所は、1963年にパリに設立され、職業訓練の研究と研修を行う IIEP-UNESCO（International Institute for Educational Planning、ユネスコ国際教育計画研究所）、タイ、バンコックに1961年にユネスコアジア教育地域事務所として設立された UNESCO Bangkok があったが、成人教育を主たる研究テーマとしたのは、UIE である。

1993年まで、この UIE の理事を当時の教育経営研究部長牧昌美先生が勤めていたが、

1994年1月以降、私が理事代理として1997年12月まで兼務し、1998年1月以降は理事として2002年まで勤めた。その仕事は、理事会への参加と UIE の刊行誌の編集委員である。毎年4月に理事会がハンブルクで3～4日間にわたって開催されたので、8年間にわたって訪問の機会を得ると同時に、10人以上の理事から構成される委員会では各国の成人教育研究者と交流でき、またテーマによってはユネスコや OECD の国際機関の研究者との知己を得ることができた。

所の生涯学習研究部とパリの IIEP とは、1992年からの二年間にわたり「生涯学習の構造化に関する国際比較研究」を行った。さらに1994年から三年間にわたり、研究部と UIE との国際共同研究として、「生涯学習の基本政策の現状と動向に関する調査」を行い、それぞれの研究スタッフとの交流ができたことも大きかった。その当時研究者として交流したアダマ・ワンやデビッド・アチャアレナは、後に UIE が改組された生涯学習研究所 (UIL) の所長となっている。

UIE は、国際成人教育会議を第2回カナダ（1960）、第3回日本（1972）、第4回フランス（1985）と主催していたが、私が関わった期間には、第5回会議（1997）がハンブルクで開催され、その準備もまた理事会で行われていた。アジアでも分科会としての国際会議が韓国やタイで実施された。

国際会議への参加や生涯学習関連の国際調査として、研究所に勤務していた際には、多くの国を訪問できたが、UIE で生まれた各国の成人教育研究者とのつながりがその調査を容易なものとしてくれた。また、国立教育研究所の国際的な教育研究機関としての背景が、私に大きな力を与えてくれたようにも思える。

(3) OECD の国際調査研究

特に、1996年に OECD から依頼が来た調査研究、「OECD 国際成人リテラシー調査」は、これまでの成人のリテラシーの認識を大幅に変えるものであった。ここでは、リテラシーを単に識字、字を読めるか書けるか、といった測定法ではなく、各国の言語文化に関わりなく国際的な比較を行おうという意欲的な理論枠組を持つ調査研究が目指されていた。その方法と理論を理解するために、私は米国の ETS への訪問調査を行った。米国の ETS (Education Testing Service) では、リテラシー尺度を担当していたアーウィン・カーシュ氏、ヤマモト・ケンタロウ氏にお会いでき、IALS から、PISA、PIAAC にいたるリテラシー研究についての経緯を教えていただいた。

研究所では梶田美春部長が中心となったプロジェクト研究を行い、実験的な調査を日本で実施し、新たなテスト質問紙の翻訳も行うことができた。この試験的調査や理論的考察は、その後研究所が参加した「国際成人力調査」(PIAAC) の第1回調査の実施にも役立てることができた。「成人力」は、おとなのコンピテンシーであり、そこには新たなリテラシーの概念が含まれていた。

このような成人教育関連の国際会議に参加した時に、各国の研究者に共通していた問題の概念が「コンピテンシー」である。コンピテンシーという能力概念の研究は、もともと優れた外交官に共通する能力は何かという研究から始まったが、1990年代には、国内外の

企業で企業内教育において特に優秀な人材がもつ能力をコンピテンシーとして捉えてその力の定義をそれぞれの職業の中で定義しようとしていた。同様に、各国の教育において重視する共通の能力概念が何か、という問題から、OECD は、教育におけるコンピテンシーの国際フォーラムを開催した。

国際的共通理解を得るために21世紀にかけて行われた DeSeCo（コンピテンシーの定義と選択）フォーラムと呼ばれるこの会議の中心人物が、スイス統計局のドミニク・ライチェン氏やカナダ統計局のスコット・マレー氏、そして PISA をマネジメントしていたアンドレア・シュライヒャー氏らであり、そうした人々との知遇を通じて、「キー・コンピテンシー」がいかに重要な概念かということを教えていただき、会議の報告書の翻訳にとりかかって刊行した。

2000年代に入ってから、OECD の教育研究革新センターにも何度か訪問し、デビッド・イスタンス氏から研究プロジェクトを紹介していただいたことも大きな力となった。この教育研究革新センターの教育イノベーション研究の成果を翻訳する作業は、『学習の本質』、『学習の環境』とほぼ10年以上にわたって行っているが、まだ完成していない。

2001年に、国立教育研究所は国立教育政策研究所へと名称が変更され、改組が行われた。この頃妻の父が亡くなり養子となったため、筆者の姓も山本から立田へ改名している。その後、2008年に国立教育政策研究所は、目黒から虎ノ門の文部科学省新庁舎に移転した。この移転によって私の研究室は目黒時代の4分の1の面積となった。

(4) 科学研究費による研究

前述したように、研究所の研究予算は、チームによるプロジェクト研究と科学研究費を基礎としている。私も20年間にわたって、研究代表として取得した科研費は次のようなものがあり、ほぼ毎年申請が認められてきた。これ以外にも分担者として参加させていただいた研究があり、感謝している。研究計画書の書き方は、大阪大学、東海大学で培った経験があり、予算の獲得や会議の運営、調査実施など研究のマネジメントを学んだが、研究所時代には研究成果報告書を毎年のように刊行する必要があったことも自己の研究能力の向上につながった気がする。

- ①生涯学習の成果の評価方法に関する実証的研究（1992－1993）
- ②高齢化社会に対応した生涯学習政策・プログラム開発に関する総合的研究（1995）
- ③市区町村における生涯学習ボランティア・バンクの活性化に関する実証的研究
(1995－1996)
- ④生涯学習スタッフの養成プログラムの実態に関する国際比較研究（1997－1998）
- ⑤現代的課題に対応した公民館の事業企画用ソフトウェアの開発研究（1997－1998）
- ⑥高等学校の学校開放講座に関する実証的研究（1998－1999）
- ⑦生涯学習社会における知識創造型学習法に関する総合的研究（2000－2001）
- ⑧標準プロトコルによる教育学知識の国際的共有化の可能性に関する研究（2003－2004）
- ⑨生涯にわたる読書能力の形成に関する総合的研究（2003－2006）

- ⑩キー・コンピテンシーの生涯学習政策指標としての活用可能性に関する調査研究
(2007－2009)
- ⑪日本文化の教育的特質を活用したキー・コンピテンシーの国際化に関する調査研究
(2010－2012)
- ⑫成人教育におけるナラティブ学習プログラムの開発とその教育的効果の研究
(2012－2013)

ただ、各研究の中にはもっと十分な成果と深い研究へと発展させる可能性が残されたが、キー・コンピテンシーや読書教育、知識創造の研究は、持続的な発展を継続していったし、それぞれの研究が相互に結びついて、さらに統合的で深い関心や考え方をもたらしてくれたものも多い。

また、生涯学習研究部長の山田兼尚先生が代表者であった「防災学習の支援システム構築のための調査研究（2005～2006年度）」は、1995年阪神淡路大震災後展開された各地の防災学習支援システムの在り方を問う研究であり、当時の防災教育研究者や実践家の協力を得て、和歌山県、高知県、兵庫県を中心とした事例研究や全国への質問紙調査を実施した。その後実際に起こった2011年の東日本大震災では、霞ヶ関ビルに隣接する文部科学省ビルも大きく揺れ、関東地方の交通網が停止し、筆者も帰宅難民の一人となって東京で一夜を過ごした。この研究の成果をまとめた本（『教師のための防災教育ハンドブック』）を読むたびに、当時の記憶がフラッシュバックする。

(5) プロジェクト研究の展開

生涯学習研究部の設置早々に開始した特別研究では、全国の生涯学習に対する学習需要調査を行ったが、その継続的研究として、科研費で「生涯学習の学習需要の実態とその長期的変化に関する調査研究（2010～2012年度）」を研究部のプロジェクトとして行った。また、科研費の研究とは別に、研究所の予算としてプロジェクト研究計画を提出して認められたいくつかの大きな研究プロジェクトがある。そのうちの一つは、文部省と協力した「基礎体力の向上をめざす生涯にわたる健康教育の総合的研究（2006年度）」であるが、これは、『健康教育への招待』としてまとめた。それ以外にも研究部としては、生涯学習の現代的課題として、高齢化、情報化といった課題への対応が求められたため、次の二つのプロジェクト研究を続けて行った。

1) 高齢化社会の研究

この研究では、教育に関連した行政部署だけではなく、福祉や保健に関わる行政機関の調査も行い、まだそれほど進んでいなかった社会の高齢化に応じて、どのような生涯学習政策を展開していく必要があるかを問うものであった。国立教育研究所がどちらかといえば、教育的課題だけを中心としていた時代から、他の行政機関における学習システムを調査した特別研究の研究活動に加えて、多くの行政機関との関連の中で生涯学習政策を展開していく必要があることをこの研究を通じて学ぶことができた。

2) メディアリテラシーの研究

1970年代以降の高度情報化社会の進展に沿ってという意味も含めて、多様化、高度化するメディアに関する知識やスキルの学習ということだけでなく、メディアへの批判的な力の学習というものがカナダやメキシコ、そしてヨーロッパで展開されていた。そうした動向と、コンピュータの発展が生涯学習を大きく変えようとしていた。筆者自身も、大阪大学から東海大学に転職した頃にはワープロを用いていたが、研究所に移ってからはパーソナルコンピュータを日常的に使用するようになっていた。20世紀の末年に行った「生涯学習社会におけるメディア・リテラシーに関する総合的研究（1998～2001年度）」という研究では、国立教育政策研究所内外の36名の研究者により、山田兼尚部長のもとに「学校教育班」「社会教育班」「比較教育班」が組織され、それぞれの教育動向と課題を追求した。

3) 知識創造社会の研究

20世紀の高度情報化社会という政策表現から、20世紀後半には、知識基盤社会、あるいは知識創造社会、ナレッジマネジメントという概念が学習を巡って現れてきていた。OECDがこのナレッジマネジメントについては、何回かの国際会議を開催し、筆者もその一つに参加した。

その頃、OECDが一連の会議のまとめとして、「Knowledge Management in the Learning Society」という報告書を刊行した。同書は、病院から発生したナレッジマネジメントや企業、そして大学における知識の移転などの問題を総合的に取り扱ったものであり、学習や教育を知識の生産、普及、活用という観点から捉えたものであった。学習が知識の習得だけに終わるのではなく、知識の探求や活用のためにも行われる必要があり、それが学校や企業、大学などを通じてどのように展開されているかを総合的に扱った理論書である。この翻訳は、『知識の創造・普及・活用』という本として刊行したが、知識経営の観点からの学習理論としてなかなか類書がみられないものとなっており、自分自身の生涯学習理論の方向付けを与えてくれた本でもあった。

4) 読書教育の研究

研究所時代の後半に取り組んだ最も大きなプロジェクトが、「言語力の向上を目指す生涯にわたる読書教育に関する調査研究（2007～2009年度）」であった。日本におけるPISA学力の低下が問われていた頃、特に読解力の低下が問題視されていた頃に言語力の向上のための調査研究を行うよう文部科学省からの要請もあって、この研究でも多くの研究者の協力をえることができた。

特に、読解力の向上のためには、子どもの読書環境の改善が不可欠という点で、文字活字文化振興機構の肥田美代子元会長や読書教育に関わってこられた日本子どもの本研究会元理事長黒澤浩氏、五十嵐絹子さんのような多くの図書館司書や学校司書、図書館長の方々との出会いは、明治時代から現代日本にいたるまでいかに各地で子どもの読書活動が熱心に進められてきたかについて大変多くのことを学ぶ機会となった。

子どもの読書活動については、独立行政法人青少年教育振興機構もまた大きな関心を寄せており、東京大学の秋田喜代美先生が中心となって、「子どもの読書活動と人材育成に関

する調査研究」が、2011～2012年にわたって行われた。この調査では、質問紙による青少年調査、成人調査、教員調査とインタビューや事例研究による地域・学校調査と外国調査が行われ、特に筆者は教員調査チームの代表としてその調査結果をとりまとめた。また外国調査として台湾調査にも参加する機会を得た。研究所外の多くの研究者とチームを組んで行った研究だったので、非常に面白い結果も得たし、それぞれの研究者との交流もできた。

5) 生涯学習機関のパートナーシップに関する研究

研究所の最後の仕事として、研究代表としては関わらなかったが、「多様なパートナーシップによるイノベーティブな生涯学習環境の基盤形成に関する研究（2014～2015）」もまた、研究所から神戸学院大学に移ってから継続したプロジェクト研究だった。この研究の代表者は、岩崎久美子総括研究官であったが、氏の比較教育研究、NPO や企業にわたる広い人脈が活かされた研究でもあったし、また、NPO の全国や地方の組織、事例、インタビュー、質問紙を含めた総合的研究でもあったから、非常に面白かった。

(6) OECD 出版物の翻訳

研究所に在職中は、前述の研究に限らず、明石書店の安田伸氏のご協力のおかげで非常に多くの OECD 出版物の翻訳に関わる事ができた。防災教育、人的資本論、キー・コンピテンシー論、世界の生涯学習や教育の動向、成人力調査などであるが、これらの翻訳については、OECD の教育研究革新センター（CERI）とのつながりが大きかった。キー・コンピテンシー研究で知り合ったデビッド・イスタンス氏からは、新たな研究動向をいろいろと教えていただいたが、世界のいろんな大学研究者を招聘して CERI のプロジェクトを展開するマネジメントの力、世界の若手研究者の研究能力やアイデアには驚くばかりであった。

(7) 多様な生涯学習理論の翻訳と研究

研究所時代の翻訳活動において、東海大学の時からの知己であった三輪健二氏にもいろいろな支援をいただいた。その後お茶の水女子大学に勤務されたが、特に、ジョージア大学のシャロン・メリアム教授の『成人期の学習』の翻訳に加わって、出版社も紹介してくださった。

メリアム教授とは韓国やタイでの国際会議で知り合い、その後ジョージア大学にも訪問した。シャロン教授は米国の成人教育学会でも著名な方であり、「成人継続研究の新しい動向」のシリーズを100巻以上にわたって出版してきた。その一つ、『成人学習理論の新しい動向』を成人学習理論研究会の人々と訳し始め、その後『成人のナラティブ学習』、『身体知』などのトピックを翻訳・刊行してきた。各書は主に福村出版から刊行しており、当時編集者として担当していただいた宮下基幸氏は現在同社の代表取締役社長となっておられる。

東京大学とは、佐藤一子教授、鈴木眞理助教授とのつながりで大学院や学部の非常勤講

師を引き受けてきたので、東京大学の当時大学院生の方々に、研究所の仕事や研究会に参加していただいた。成人学習理論研究会のメンバーは、研究所の岩崎氏（現放送大学教授）に、常磐大学の金藤ふゆ子氏（現在は文教大学教授）、荻野亮吾氏（現日本女子大学准教授）、佐藤智子氏（現東北大学准教授）、青山（古屋）貴子氏（現山梨学院大学学長）、園部友里恵氏（現三重大学准教授）、中村由香氏（現生協総合研究所研究員）らであり、翻訳本や編書のテーマ毎に参加者は変化している。

研究所時代には、生涯学習の啓発本もいくつか刊行した。特別研究の比較研究班に参加しておられた赤尾勝己氏は、その後関西大学に移られたが、氏のご協力を得て、『学びのスタイル』、『学びのデザイン』の二つの学習方法論を玉川大学出版部から刊行した。その後も赤尾氏には研究所の研究にご協力いただいただけでなく、執筆の機会もいただいている。

前書では、研究所の高等教育研究部の部長であった故喜多村和之先生の弟子、森利枝氏（大学改革支援・学位授与機構教授）にも参加いただき、その後も国際的な研究や翻訳出版に協力していただいた。

2014年、22年間勤務した研究所を退職することにした。研究所時代にお世話になった今西幸蔵教授のお誘いにより、神戸学院大学で教職課程を担当する事となったからである。

2014年3月には記念講演会を持たせていただき、同僚の岩崎総括研究官や研究部のスタッフの人たちが計画して日比谷公園内のレストランで送別会を開催して下さった。当時の尾崎春樹所長も参加し大勢の研究者や職員と一緒にダンスまで披露していただき、およそ30名近い参加者に送別の辞を述べた。

国立教育政策研究所の時代を通じて、小生の研究活動を支えてくださった研究協力者に加えて、20年近くにわたり、事務員として山本邦子さん、三浦恵子さん、斉藤文子さんには大変お世話になった。この人たちの支援があつてこそ、上記の研究活動が実施できた。

5. 神戸学院大学人文学部での教育と研究（2014～2023年）

(1) 大学教育

研究所の主な仕事内容は、研究であったが、神戸学院大学での仕事としては、教育活動に非常に多くの時間を傾けた。

神戸学院大学の「學報.net」によると、1990年に創設された神戸学院大学の人文学部は、「今後の大学教育を考えるうえで、広い視野で物事を捉え、考える力を養うリベラルアーツ（教養教育）がより重要になるとの考え」から開設されている。その後1993年に教職課程が設置されている。筆者が就任したのが2014年度だから、まだ創設後20年少ししか経過していなかった。しかし、就任と同時にポートアイランドキャンパスに現代社会学部が設置され、人文学部の何人かの教員が移籍している。また、2019年には人文学部心理学科が心理学部へと改組され、約半数の教員が心理学部教員となっている。

就任と同時に担当した教科は、教育方法論、生涯学習論、人間形成入門、同演習、人文入門演習、特別演習とそれほど多くはなかったが、別に大学院の講義も担当した。その後2017年の今西先生の退官に伴って教職入門、教育制度論などを担当することとなった。私学の教員としてはそれほどコマ数が多くはないのだが、それまで大学の講義は非常勤を年

間に2から3コマしか担当していなかった身には、その準備が大変だった。また、3年度からのゼミを担当するとそれはそのまま卒論の研究指導の担当となり、12月の卒論提出時にはだいたい16人～19人のゼミ生の卒論指導に追われた。数年後には、これに修士の指導も加わったため、11月～1月は学生の卒論・修論指導に明け暮れる日々となった。

また、講義そのものは、学習方法論を中心としたため、メディアやICTが好きでそうした道具を活用した学習論そのものに取り組んできたから、LMS（学習マネジメントシステム）を導入するなど自分なりに工夫もでき、学生との対話も非常に楽しく、精神的には若返った気がしたものだった。

就任当初から担当したゼミ生には、教員になって活躍している人がいる。加藤亜衣さん、佐竹紗依さん、宝来大樹さん、吉井夏央さん、柴田俊介さん、そして法学部卒業生の梶山健さんである。また、大学職員の仲井真志織さんやタレントになった井上祐貴さんからはいつも元気をもらっている。

人文学部での教育や研究面では、就任当初から学部長であった寺嶋秀明先生、早木仁成先生、野田春美先生にいろいろと助言をいただいた。また、学部長秘書の鎌谷典代さんからは10年間にわたるご支援や助言をいただいた。慣れない学内委員の仕事については、同僚の先生方がいろいろと助けてくださった。

平日は大学近くに借家を借り、週末に神奈川に帰宅する日々が続いたため、研究や翻訳の時間が非常に限られることとなった。

（2）成人教育

2016年に放送大学へ転職した岩崎久美子氏から連絡があり、2018年度からの放送大学のラジオ講座「生涯学習」を担当してほしいとの要請があった。そのために2016年度中に15回分の印刷教材を書き上げ、2017年度前半には放送講義を収録し、2018年度から4年間にわたって講義を流すこととなった。

ようやく大学の講義もこなせるようになった時期であったが、2016年度末までに、およそ教科書一冊分の手稿に必死に取り組んで、その時点で考えていたことやこれまでのデータを活用して、『生涯学習の新しい動向と課題』という原稿を完成した。

放送大学の講座の授業準備はこれだけで終わらず、各回の講義にはゲストを招待して、対論形式でラジオ講義の収録をする必要があった。そのため、各回の講義用のシナリオを収録日までに作成し、ゲスト宛に送付して了解を得なければならない。15回の講義に協力していただいた先生がたには大変感謝している。本来なら、この講義に即して、各地の放送大学にも指導にいくことができるということであったが、さすがに本務大学の講義があるため、遠慮した。

神戸学院大学の人文学部の先生の中に、小生の講義を聴いている方がおり、とても恐縮した覚えがある。こうした教育活動とともに、大学勤務中には、次のような研究に取り組んだ。

(3) ICT を活用した教育の研究

就任と同時に、教務係の教職担当者であった松宮慎治さんをお願いして、1990年代以降に取り組んでいたポートフォリオを活用した学習システムの導入を図った。朝日ネットのスタッフから、Learning Management System として「マナバ (manaba)」を進められていたが、米国では moodle が主流であったことやその他の LMS を比較検討して、利用のしやすさと日本の大学への導入状況を鑑みて、結局マナバを採用し、2014年度より利用を開始した。

教職課程をとった学生を登録するため、有瀬キャンパスとポーアイキャンパスの教職課程履修者が毎年約100名が利用できるようになった。また、教職課程科目には、その他の多くの科目が含まれており、それぞれの科目を担当する教員の利用も増えている。

特に、2019年度からは、教職教育サポート室の先生も利用できるようにしたため、サポート室関連の講座でもその利用が行われている。また、サポート室の先生は、教職科目を担当するためそれぞれの科目でも利用されるようになってきた。

ただ、このマナバの利点であるポートフォリオを各履修者が利用している事は間違いないと考えられるが、その利用の実態を正確に把握する研究をすることはできなかった。

しかし、ポートフォリオについては、全学教育推進機構の教育開発センターの研究資金を得て、他大学の状況を含めた調査を実施でき、調査報告書にまとめた。

教育開発センターの資金を活用した研究では、学研ホールディングスの取締役、古岡秀樹氏と ICT 教育の専門家で学研の研究者中島徹氏のおすすめもあって、「スマートペン」と呼ばれる電子ペンの実験研究も行った。この研究では福島あずさ先生が協力してくださった。1年次から4年次のゼミの学生を対象にして、スマートペンを配布し、ノートテイキングにどれほどの効果があがるかを調べた。スマートペンとは、録音機能のついたペンであり、録音内容を電子的に文章に変換する機能を備えたものであった。私のゼミ生の中には、二年間にわたってずっと使い続けた学生が一人いたが、学習者の勤勉さがその効果に大きく影響していた。

(4) 読書教育の研究

国立教育政策研究所時代から継続した研究が、読書教育の研究である。この研究では、科研費として、「家庭内読書の普及をめざす『家読』事業の教育的効果に関する実証的研究」(2014-2015)と、「読解力の系統的発達を図る学校図書館利用教育のループリックモデルの開発研究」(2016-2019)の二つを行った。

前者は、研究所時代に十分行えなかった家庭内読書の実態を探るものである。特にその成果として、家族は、子どもの発達に応じて読書の形態を変えていく。親がどのような読書活動をするかということが、子どもの読書活動に影響することは、青少年教育振興機構の調査でも明らかにされていたが、子どもが幼児から青少年へと成長するにつれ、親の方は次第に独立した読書活動を行っている。もっとも親の職業や仕事内容によってその活動には大きな差異があり、国際的にみてどのような変化があるかは、2013年と2022年に行われた国際成人力調査のデータの分析からさらに明らかにできるのではないだろうか。

後者は、学校図書館利用教育として、公共図書館で提供している図書館利用マニュアルを参考にして、ループリックモデルの開発を行おうとしたものである。学校図書館活用のガイドは、学校段階や発達にそったおおまかなスキルが提供されているが、特に近年は、調べ学習や探究学習の発展の中で少しずつ定型的なものが提供され始める傾向にあった。探究学習が小学校から高校にいたるまでの学校カリキュラムの中で本格的に取り組まれ始めた現在、特に「深い学び」の方法がどう展開されていくかが興味深かった。そこで、この問題関心から取り組んだのが世界の大学図書館における学びのガイドの追求であった。

(5) 大学図書館の研究

大学着任後しばらくしてから、当時の岡田豊基学長から、私学高等教育研究所の研究員として仕事を紹介された。その後の佐藤雅美学長時代もこの仕事を引き継ぎ、2022年度からの中村恵学長でも引き継いでいる。

私学高等教育研究所は2004年に設立されて以来、日本私立大学協会を組織母体として、大学改革や経営・財務の改善に関わる情報提供や高等教育政策への提言を目的として、調査研究事業を行う組織である。日本私立大学協会の加盟校は、約400であり、全国にわたる組織となっている。私立大学の組織としては、日本私立大学連盟、日本私立大学連合会有り、それぞれに加盟大学が異なっている。

日本私立大学協会の事業に私学高等教育研究所と教育学術新聞がある。研究所には研究員と客員研究員がそれぞれ約20名おり、研究プロジェクト毎にチームが構成されている。これらの研究員は、高等教育の研究者が中心となっているが、国立教育政策研究所時代の高等教育研究部のメンバーも多く含まれており、懐かしい人々であった。私は、2015～2017年の「地方創生と大学」プロジェクトに加わり、濱名篤氏や沖清豪氏、塚原修一氏らと幾つかの大学の事例研究に参加した。その結果はフォーラムで発表した。

また、同協会の教育学術新聞（アルカディア学報）には、研究員が執筆する義務があり、専門的な研究の発表を行っていた。私は図書館研究として、大学図書館についていくつかの記事を執筆する機会を得た。その記事から『私学経営』という月刊誌からも依頼があり、日本の大学図書館の記事を書いたことをきっかけにして、世界の大学図書館についての執筆をお願いし、1年間にわたる連載の機会を得た。

(6) 推進研究費による研究活動

神戸学院大学の人文学部では、多くの研究費の助成をいただいた。その研究課題は次のとおりであり、非常に自分の関心のある研究について自由な研究をさせていただいた。

- 2014 学修支援の教育方法としてのeポートフォリオの教育的効果に関する実験研究
- 2015 人文学部学生を対象としたキー・コンピテンシーの向上に関する実証的研究
- 2016 eポートフォリオ活用によるコンピテンシー向上と形成的アセスメントの実験研究
- 2018 ラーニング・コモンズの活用可能性に関する調査研究
- 2019 教員の指導力の自己評価ループリックに関する実験的研究

2020 学びのユニバーサル・デザインに基づく大学の遠隔学習システムの開発研究

2022 大学図書館による学生のキャリア学習支援プログラムに関する調査研究

研究課題は、ICT 教育に関わる研究や教育法、そして大学図書館の研究が中心となった。ただ、ICT 教育の研究の問題は、テクノロジーが急速な進歩を遂げていくために、研究成果の内容がどんどん役に立たなくなる可能性があるという点である。その認識は、1990年代のメディアリテラシーの研究から持っていた。しかし、幸いにもインターネットを用いた LMS については、あまり大きな変化が生じていない。

ただし、リテラシーについては、メディアのテクノロジーの進歩によって、学ぶべきスキルやデジタルリテラシーが急速に向上している。また、リテラシーの拡大概念であるコンピテンシーについても、2000年代には、キー・コンピテンシーが主となっていたが、2010年代には OECD が21世紀スキルの重要性を強調するようになり、変化が生じている。

また、2019年以後に生じたコロナ禍の旋風が教育界に大きく影響し、文部科学省による教育のデジタル・トランスフォーメーション政策によって、一人一台端末が小学校から高校にまで配布され、教育の現場を大きく変えていくこととなった。大学教育は、この点でも大きな遅れをとっている。大学の経済的な基盤の格差が、学生の教育機会の格差を生み出し、その格差は私学だけでなく、国立大学にも及んでいる。少子化問題や文部科学省による研究費の配分と私学助成、国際化政策が大学に大きな影響を及ぼしていることは教育学術新聞で長年にわたって取り上げられており、大学による地方創生というよりも、大学の合併や大学自体の存続の問題が短期的、長期的な課題となっている。

(7) 大学の役職や委員活動

大学では、これまで学生委員、卒論委員を担当したが、2017年度からは、教職課程の教務委員を引き受け、今西先生が2017年度で退職されたので、2018年度よりは、教職教育センター主任、副センター長の役職を引き継いだ。それぞれの役職からは大学の教務や学生の実情など学ぶことが非常に多くあった。ただし、2020年度から2023年度前半のコロナ禍の中ではほとんど神奈川の自宅でリモート教育を行ったため、教務の仕事については、今西先生の後任の井上豊久先生や水谷勇先生が大変助けてくださった。2023年度よりは井上先生に副センター長を引き継いでいただいた。

2014年に就任した折から、教務課職員の松宮慎治氏と教職課程専用の LMS (manaba) の開設や2018年度からの心理学部開設、全学の教職課程認定審査に応じて、教職課程カリキュラムの問題解決に取り組んだことにより、大学カリキュラムについて多く学ぶことができた。松宮氏は、在職中から広島大学大学院で大学経営、とりわけ予算問題の研究にも取り組んでおられ、その後信州大学に転職された。その後も池田隆一氏や松本育子氏、吉本優太氏、酒本和樹氏ら優秀な職員スタッフが教職課程を支えてくださっている。

また、教職教育センターは、大学の教職課程履修者にとって非常に大きな役割を果たしている。その広報・研究事業として「教職教育センタージャーナル」が2015年より刊行され、論文と実践研究が毎年公開されるようになった。さらに、生田卓也先生がセンター長

を務められた折に、サポート室に専念する特任教員として、小嵯麻由、山下恭両先生が雇用された。お二人は、有瀬、ポーアイ両サポート室の相談教員のまとめ役を務められ、2020年度よりセンター広報誌も刊行し、教員採用試験対策講座やメンター制度が実施され、サポート室を効果的に運用されている。

大学外では、私学高等教育研究所の研究員を約10年間、国立教育政策研究所の客員研究員を3年間勤めた。また、教育委員会では、大阪市の社会教育委員、神戸市の図書館協議会委員として協力した。

2014年に学校図書館法が改正され、学校図書館職務に従事する職員（学校司書）を置くよう努めることやその研修の実施に努めることが各教育委員会の努力義務として制定された。そのため、各教育委員会では学校司書研修が盛んに行われるようになった。私も、神戸市の学校図書館司書研修講座に2015年度に協力し、その後2016年度からは学校図書館司書入門講座の講師として、一度を除いてほぼ毎年講演を続けた。神戸市の図書館司書の人たちは非常に研究熱心であり、学校図書館利用マニュアルを作成し、学校司書の全校配置に尽くされた。

2018年2月より西宮市社会教育委員を依頼され、2020年度からは生涯学習審議会議長を3期勤め、2024年5月で任期を終了する。その間、西宮市の生涯学習推進計画（令和3～12年度）の作成と生涯学習審議会答申を作成した。西宮市は私が中学・高校を過ごした地域であり想い入れも深い、教育委員会のスタッフも優秀で新たなアイデアをどんどん取り入れてくださる。

6. 研究の継続へ

長年にわたる研究と教育活動を、継続的に忍耐を持って一番支えてくれたのは妻であることはいうまでもない。義父が亡くなった折に、姓を山本から妻の家の姓立田に変えたが、大学や高校の時の知人からは未だに山本と呼ばれることが多い。研究所時代に変更したので同僚や講演の受講者になぜ変えたかと問われることもあったが、形が変わるだけで中身は変わっていませんと答えたことは覚えている。

研究活動においては、多くの研究者の方々にお世話になった。また、教育活動や研究活動において、研究所や大学の職員の方々にも大変お世話になった。

そして、原稿の執筆において大きな支えや助言をくださったのが、編集者の皆さんである。明石書店の安田伸氏、福村出版の宮下基幸氏、学文社の田中千津子氏、ジアース教育新社の中村憲正氏、『社会教育』の近藤真司氏、時事通信の舟川修一氏といった人々は、いろいろなアイデアを提供してくださり続けている。新評論の武市一幸氏からは、「本当に良い本は売れます」という言葉をいただいたが、本当に満足のいく良い本や良い論文をできれば書き続けたい。

社会的活動として、研究所時代には、文部科学省の各種委員、(財)音楽文化創造の生涯音楽学習の振興、目黒区の社会教育委員や杉並区の図書館委員、東京都の調査研究など多くの社会活動にも協力してきた。また、神戸学院大学では、関西の地域、大阪市、神戸市、西宮市の社会教育や生涯学習の委員としても協力した。

退職後は教育活動がなくなるが、研究活動や社会活動は継続する予定である。実際、出版社から依頼された翻訳の仕事もまだ3本残しており、研究会の活動もあと数年は継続する。雑誌の連載も現在継続しているものに加えて、新たな連載が4月より始まる。成人のリテラシーや学習など明らかにしていない研究課題が多く残っているからである。

現実的な研究リソースとして研究予算は全くなくなるが、研究に協力してくださる仲間はあるし、自分自身の研究スキルをさらに向上させていくことができる。インターネットと多様なデジタル機器がその可能性を生成系 AI の活用も含めて大幅に拡げてくれることは間違いない。これまでに執筆した原稿をさらにまとめながら、自分自身の知識の体系化作業をさらに進めていくことにしたい。

参考文献

- 山本慶裕、1982、「中小企業経営者の学歴と補充類型」大阪大学人間科学部紀要 Vol.8、pp.61-82
山本慶裕、1985、「公共図書館システムの Accessibility に関する一考察：松原市民図書館の事例」大阪大学人間科学部紀要 Vol.11、pp.217-246
山本慶裕、1986、「物質文明・経済・資本主義15～18世紀一日常性の構造（1、2）フェルナン・ブローデル著、村上光彦訳」『文明』（47）、pp.99-106、東海大学文明研究所
学報.net 2024/01/10 取得
(https://www.kobegakuin.ac.jp/gakuho-net/frontline/2009/200912/p_1.html)

立田慶裕先生のご退職にあたって

井上 豊久

2024年3月、昨年度まで教職課程の主任をされていた立田慶裕先生が退職される。2014年に本学に着任されており、日本の教育社会学者、社会教育学者として著名な方である。1980年代の半ば、私が大学院生の頃、先生は既に日本生涯教育学会等でご活躍されており、その当時は山本先生という苗字であったが、私も指導・助言をいただいた。東海大学を経て文部科学省国立教育政策研究所で働いておられた頃、共同研究者としていくつかのテーマに関わってご一緒させていただいた。2000年に国立教育政策研究所の総括研究者になられた。私が前任の福岡教育大学に勤めていたころ、先生にボランティアの役割とその意義についての講義をお願いした事があり、人生で重要なのはあいさつ、まず名前を覚えようなどと、現場で役に立つ幅広い見識とユーモアを交えたお話に学生が感動し、学びを充実させていただいたことが印象深い。以後今日にいたるまで、教職課程における学生の育成、教育学の研究者としての仕事をご一緒させていただいてきた。国立教育政策研究所（旧国立教育研究所）に1993年より勤務し、2014年に退職するまで生涯学習についての多くの研究テーマにかかわってこられた。精力的に毎年のように多くの著書を刊行され、『生涯学習の現代的課題』（1996年、全日本社会教育連合会）、『メディアと生涯学習』（2000年、玉川大学出版会）、『参加して学ぶボランティア』（2004年、玉川大学出版会）、『教師のための防災教育ハンドブック』（2013年、学文社）、『読書教育のすすめ—学校図書館と人間形成』（2023年、学文社）他、理論研究とともに現場にも有用な本を数多く出されている。メディア・リテラシー教育、成人教育、健康教育、防災教育、読書教育、学習需要などの研究所のプロジェクトを主導させていただきだけでなく、『キー・コンピテンシー —国際標準の学力をめざして—』（2006年、明石書店）、『知識の創造・普及・活用 —学習社会のナレッジ・マネジメント—』（2012年、明石書店）、『学習の環境—イノベティブな実践に向けて』（2023年、明石書店）、といった重要な国際的学術書の翻訳にも数多くかかわってこられた。また、生涯にわたる音楽文化の創造のために、生涯学習音楽指導員の研修にも専門家として携わられた。立田先生の研究テーマは、生涯学習一般はもちろんのこと、メディアや図書館についてなど生涯学習の現実の問題にも対応されたものも多く、幅広く高い見識から、いかに学術的に解決していくかということにもあったと考えられる。神戸学院大学人文学部教授・教職課程主任の立場で教員養成に真摯にかかわってこられた。教職を目指す多くの学生が先生のゼミを希望し学校現場に立っている。立田先生はICTの重要性をいち早く認識され教職課程ではパソコンを使った教育・学習システムであるmanabaを導入され、有用な活用を図ってこられた。常に先駆的に研究を進めるだけでなく図書館関係の委員をお勤めになるなど大学教員として地域へのご貢献も多い。私も先生のご指導を賜った一人として教職課程の充実に加え、社会や地域に貢献したい。

立田慶裕教授を送る

水谷 勇

国立教育政策研究所に永く勤められ、生涯教育・成人教育分野の重鎮第一人者のお一人である立田慶裕教授を2014年に本学にお迎えして早10年にならんとして、このたび、ご定年による退職を迎えられた。

旺盛な研究活動と意欲的な講演活動を展開されて本学に立田在りと、本学の名声を上げていただいた。とりわけ、読書活動、図書館の充実に力を入れられ、神戸市の教員育成指標にも本学教職課程の代表として参画されて一文入れるなど、先生の業績は大なるものがある。

教育学者として教育の自立性と主権者国民の形成を図ることに力を入れて、大学の自立性を大事にしながら本学の教職課程の発展に尽力してきた人間からは、ICT 教育など時代の最先端を行かれて、本学の研究・教育と教職課程の運営の改革を図ろうとされてきた先生からは、歯がゆい思いを抱いてこられたことと思う。にもかかわらず、先生の豪腕もあって、先生が開発に助力された manaba の導入と活用の道筋をつけ、本学の研究・教育に大きく貢献された。

先生のこれらのご業績の足下にも及ばないが、先生のご業績を引き継ぎ発展させて、国民主権の堅持と大学の自治を守りながら、本学の教学を通しての有為な人材輩出に一層励むことを表明して、先生のご退職への贈る言葉としたい。

立田慶裕先生

—— 好奇心駆動型の教育研究者 ——

松宮 慎治

1. はじめに：サラリーマン化する大学教員

学部を卒業後、神戸学院大学には事務職員として15年間お世話になり、学外も含めて、大学という世界にどっぷり浸かることになった。その過程で、「大学教員がサラリーマン化している」¹⁾ という問題意識をもつようになった。事務をそつなくこなす、メールの返信が早い、会議には定刻に出席する、服装が折り目正しい、上位の職階には従い、立場をわきまえる……などなど。もちろん、いずれも悪いことではないのだろう。「社会人」として学生の見本にもなるのかもしれない。しかしいつのころからか、大学の教育研究者たるもの、本当にそれでよいのかという疑問から逃れられなくなった。社会をリードし、新たな価値観をもたらすどころか、むしろ既存の社会に隷属するような有様にもみえたからだ²⁾。ありのままに言えば、事務職員として組織運営を担うなかで、教員には自主性や自律性を重んじる立場から批判的であってほしい場面でも、逆に官僚的なマネジメントに加担され、がっかりすることもそれなりにあった。

このような問題意識にあてはまらない同僚のひとりが、立田慶裕先生だった。私なりに解釈すれば、立田先生は〈好奇心駆動型の教育研究者〉と形容できる³⁾。以下、思い出の共有を兼ねて、いくつかのエピソードを挙げよう。

2. 思い出

(1) manaba の導入

コロナ禍を経た今でこそ、クラウド型の教育・学習支援サービス（いわゆる Learning Management System：LMS やポートフォリオ）は一般的になっている。そのかなり前、2014年に着任された当時から、LMS やポートフォリオの利活用に取り組まれるという慧眼を立田先生はお持ちだった。きっかけは、当時の教育開発センター（（現）全学教育推進機構）が創設した教育改革助成金の獲得だった。おそらく、それまでも外部資金の獲得に熱心であられた先生にしてみれば、学内の競争的資金にも、挑戦的な課題で申請することは当然というお考えをお持ちだったのだろう。先生が導入された manaba（株式会社朝日ネットによる）⁴⁾ は、のちに教職課程全体で導入することになった。そのさい、教育改革助成金による実績があったおかげで、「すでに実験的に運用を開始し、効果があがっている」という予算要求を行うことができた。2020年に突然訪れたコロナ禍で、manaba におおいに助けられたことはいうまでもない。

(2) 教員免許状更新講習における「ポケモンGO」の実演

(1)が好例だが、立田先生が新しい情報技術に関心を持ち、導入に積極的であることはわかっていた。さて、スマートフォン向け位置情報ゲームアプリである「ポケモンGO」がリリースされたのは、2016年7月のことである。現在ではプレイヤーの年齢層がかなり上がっている気がするが、リリース当時は10代がほとんどだった。ちょうど一か月後に教員免許状更新講習を控えていたので、私は先生に、「講習中に、ポケモンGOを実演してみませんか」と提案してみることにした。以前から、初中等の学校現場で新しいサービスが一方的に忌避されがちである（しかも、教師よりも子どもの方がよく知っているケースが多い）ことに課題を感じていたからである。すると先生は、「せっかく我慢していたのに、また論文が書けなくなってしまう……」と仰りつつも、さっそくアプリケーションをダウンロードされた。講習当日、先生はiPhoneを講義室のプロジェクターにミラーリングし、リアルタイムでポケモンをゲットされた。会場が拍手に沸いたことを覚えている。

(3) 膨大な研究業績の量

立田先生をお迎えするとき、はじめて教育研究業績書を拝見し、その広範な研究関心に驚いた。研究業績の量は、多すぎて先生ご自身も把握しきれていないのではないだろうか。先生とご一緒した期間には、偶然、グローバル・コミュニケーション学部や心理学部の新設、再課程認定といった、法人の経営戦略にとって重要な局面が何度も訪れ、結果として教職課程認定申請の機会が5回もあった⁵⁾。課程認定の教員業績審査はときに厳しいが、どの担当科目・分野でも審査で落ちることはないうえに、別の科目でほかの教員が審査に落ちても、立田先生がいらっしゃるという安心感があった。「国研⁶⁾では、研究業績の評価は昔から当たり前だった」と仰っていたことを思い出す。私など、「量より質が重要」とうそぶいて、研究生産から逃げたくなることもある。量によって質が磨かれる側面があることを認め、見習わなければならない。結果にへこたれず、バッテリーボックスに立ち続けるには、知的な勇敢さが必要であり、誰にでもできることではない。

3. 教育と研究を統合する“余白”の価値

ところで、日本の大学では、教育重点型と研究重点型に、教員の役割をわけるときではないかという議論が、しばしば生まれる。特に私立大学をめぐっては、研究は教員の趣味に過ぎないので、教育のみしていればよいという言説すら聞かれることがある。ところがこれは、アメリカの大学モデルに依拠した考え方である。日本の大学は、教育と研究を統合的に考えるドイツモデル⁷⁾を参照して作られており、教育と研究を区別する歴史を歩んできていない。教育だけ、もしくは研究だけに従事する立田先生など、想像できるだろうか。

教育と研究を統合するモデルのもとでは、教員免許状更新講習でポケモンGOを実演したり、LINEで学生にバイマックス⁸⁾のスタンプを送れたりするくらいの自由や遊び、余白が必要だ。余白が削られれば、やがて好奇心も失われていく。新しい何かが創造されるための源泉が、好奇心であるにもかかわらず。

かつて、「先生でもやろう」「先生にしかねない」という消極的な学校の教師を批判し

た「でもしか先生」という言葉があった。「大学教員がサラリーマン化している」という問題意識は、好奇心のような内発的モチベーション由来ではなく、職業選択の結果としてポジションに収まっているという意味で、「でもしか先生」批判と通底する。私がこうあってほしいと考える教育研究者像は、「でもしか」では決してない。たぶん“職業”ですらない。たとえるならその存在は、バンドマンや小説家に似た“生き方”に近い。

ここまで記してから、立田先生らが編著された『勉強せえ！—学びをめぐる12のエッセイ』（日常出版）をひもといてみた。先生とのお付き合いが始まる以前のことは、実はあまり詳しく存じ上げない。せっかくなので昔の著作を拝読したいと思い、今回を機に取り寄せたものだ。すると、立田先生ご自身が執筆された第4章に、奇遇にも次のような、余白の価値への言及をみつけた（立田 2003）。

生まれた時から忙しく、あわただしい毎日を過ごすうちに定年を迎える。自分がいったい何のために生まれてきたかもはっきりわからず、競争社会の中で生きるために一所懸命忙しく働き続け、いつのまにか疲れ果て、死んでいく。そんなウソだろうと思うような人生コースが現代では子ども時代から提供されている。

（執筆者により中略）

要は、あわてず、ゆっくり学ぶこと、である。

時間感覚を磨くためにも、今後の学習をとりあえずの学習から、丁寧（ていねい）な学習へと意識を変えていく。それはまた、とりあえずの人生から、丁寧な人生への変化でもあろう。

最後に、ゆとりをもって空白の時を過ごそう。

（空白の時）

4. おわりに：できるだけ長く、これからも

先の玉稿が編まれてから20年、残念ながら社会のゆとりは回復するどころか、むしろ失われ続けたように思う。もっとも、それらを「どう受け止め、対処するかは、個人的問題である」（立田 2003：71）ことは変わってはいまい。自由意志をもつ個人として、何のために生き、どう学ぶのか。余白の価値から目をそらして、いつの間にか忙しいだけの「とりあえずの人生」を送ってはいないか。長く生涯学習を追究してこられた先生から、改めて問われた気がしてならない。

先生は、今年度でたしかに定年を迎えられるのだろう。だが、“生き方”に定年は存在しない。お体をご自愛いただきながら、どうかできるだけ長い間、立田先生らしい自由な教育研究を続けてください。

◇注

- 1) ここでの「サラリーマン」は、既存の社会や所属組織の価値にのみ忠実な行動を選択する者のアナロジーであり、字義どおりの「サラリーマン」を揶揄する意図はない。また、ジェンダー平等に配慮すれば、「サラリーパーソン」「ビジネスパーソン」などと記すべきかもしれないが、左記をよりの確に表現する用語として、あえて「サラリーマン」を用いている。
- 2) このような問題には、ふだんは気づきにくいのが、危機になってはじめて前景化する性格があるだけに厄介である。同時に、これらは大学の教職員固有の問題というより、結局は現代日本のエスタブリッシュメント全体の問題ではないかということが、東日本大震災をめぐる羽田貴史のエッセイなどを読むとよくわかる。羽田（2014）としてオープンアクセスなので、ぜひ参照されたい。
- 3) 好奇心駆動型（curiosity-driven）と対置される態度が使命達成型（mission-oriented）であるといわれることがある。あるとき、後者の基準で前者が評価される状況が、科学技術・学術審議会の分科会における「人文学分野」で批判的に議論された（科学技術・学術審議会学術分科会学術研究推進部会人文学及び社会科学の振興に関する委員会 2008）。その意味では、立田先生を「人文学部」にお迎えした事実には、「人文学とは何ぞや」という問いに対する示唆が含まれている気もしている。
- 4) manabaには、優れたユーザ・インターフェイス、開発も含む導入コストの相対的安さなどメリットが多い。なお、神戸学院大学では、現代社会学部でも導入されている。
- 5) 記憶の範囲で、申請機会は次のとおり。グローバル・コミュニケーション学部グローバル・コミュニケーション学科（英語コース）（中一種免（英語）、高一種免（英語）、総合リハビリテーション学部社会リハビリテーション学科（高一種免（福祉））【以上2014年5月】、栄養学部栄養学科（うち管理栄養学専攻）（栄教一種免）【2015年3月】、心理学部心理学科（高一種免（公民））【2017年3月】、現在の心理学研究科をのぞく全学部全研究科（再課程認定）【2018年3月】、総合リハビリテーション学部社会リハビリテーション学科（中一種免（社会）、高一種免（公民））【2020年3月】。
- 6) （現）国立教育研究政策所。
- 7) このようなモデルは、一般に「フンボルト理念」と呼ばれてきた。「研究を通じての教育」「学ぶ者と教える者の共同体」などの概念の総称とされるが、日本を含めて世界の大学に「フンボルト理念」が伝播したという説自体が「神話」にすぎない（歴史的に証拠づけられていない）とする批判もある（潮木 2008）。なお、アメリカでは、カレッジの教師が当初研究者とみなされておらず、研究や学内行政などの役割が事後に付加されたことにより、「教育型」「研究型」「運営型」「学外活動型」への役割分化や、それによる対立・葛藤が生まれたとされている（潮木 1993）。
- 8) 2014年に公開された、ウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオ製作のアニメーション映画。このように、立田先生の関心の広さは、研究にとどまらない。映画やバードウォッチングなど、趣味も多彩でいらっしやるのである。

◇引用文献

- 羽田貴史, 2014, 「私の東日本大震災日誌—京都市・東京都・仙台市・南相馬市・東広島市」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第7号, 217-228.
- 科学技術・学術審議会学術分科会学術研究推進部会人文学及び社会科学の振興に関する委員会, 2008, 「序「学問」について」文部科学省ウェブサイト. (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/015/siryo/attach/1343350.htm, 2023.11.19.)
- 立田慶裕, 2003, 「時間のセンスを身につけろ—タイム・リテラシー入門」立田慶裕・鍋島祥郎編『勉強せえ！—学びをめぐる12のエッセイ』日常出版, 67-84.
- 潮木守一, 1993, 『アメリカの大学』講談社.
- 潮木守一, 2008, 『フンボルト理念の終焉？—現代大学の新次元』東信堂.

立田先生のご退職に寄せて

梶山 健

はじめに、『教職教育センタージャーナル 立田先生退職記念号』の執筆に携わる機会をいただくことができたため、立田先生との思い出を大学在学中と大学卒業後に分けて記す。

第一に、大学在学中のことである。私が立田先生と出会ったのは、2回生の頃である。かねてより今西先生から素敵な先生がいらっしゃるよ。とお聞きしていたので、とても楽しみであったことを今でも記憶している。立田先生には教職教育分野の『特別活動の研究』の講義をご担当いただいた。中学校・高等学校におけるいわゆる「総合」の時間やホームルーム活動における学習活動や探究活動を行う上で大切なことを多く学んだ。特に、印象に残っているのは立田先生ご自身が研究に携わってこられた3つのキー・コンピテンシーの紹介を受けながら、多様な集団の中で他者との人間関係を形成できるような学習活動・探究活動が大切であることを学んだ。今日、教育現場において「総合的な探究の時間」の内容を検討する際にも、立田先生の講義で学んだことを忘れずに計画・進行することを心がけており、財産となっている。このほかにも、図書を通した学びの習得や、生涯学習の大切さを教わってきた。講義を受講してから立田先生の研究室へ質問しに訪ねたり、指導案の添削をしていただいたり、時にはご飯や映画鑑賞にお連れいただいたりなど、数えきれないほどお世話になった。3回生になり、法学部に在籍していた私は、キャンパス移転の兼ね合いによりポートアイランドで過ごすこととなった。立田先生が所属される有瀬キャンパスに行く機会が減ってしまい、なかなかお会いできない日が多くあったが、学内でお会いした際にはいつも気にかけてくださり大変心強かったことも鮮明に覚えている。4回生になり、教育実習で母校にて3週間実習をしていた際、非ゼミ生であったことから、立田先生が研究授業に来て下さった。中学3年生の社会（公民分野）の授業を担当し、母校の先生方とともに立田先生に授業を見ていただいたが、研究授業以前の授業の時よりも計画通りに進まず冷や汗をかきながら授業を行っていたことも印象に残っている。研究授業後の討議の際には、立田先生の優しく心に残る言葉で講評をくださったことや、先生の研究室で教育実習の話題になると、「あんなに緊張してる梶山さんの姿、初めて見たわ。」と笑って言われたことも思い出深い情景の一つである。

第二に、大学卒業後のことである。大学を無事に卒業すると同時に教員免許を取得することができ、前段にもあるように高校の教諭として教育現場に従事することができている。ある日、自らも受講した『教育実習事前指導』にパネラーとして登壇させていただける機会をいただいた。はじめの数期間は、教育実習の体験談をお話しするパネラーとして後輩となる学生に向けて発信をさせていただくことがメインであったが、教科に関する心得についても講義もさせていただける機会をいただけたことで、さらに教育現場で実践してい

ることを共有してみたり、大学生からの声を聞いてみるのができたりと、とても有意義な機会を与えてくださったことに感謝している。教員生活が始まって通算10年も経過していないが、そんな中でもさまざまな体験の機会、発見の機会、学びの機会を与えてくださった立田先生の存在は、この場には書ききれないほど偉大な存在である。私自身、立田先生が与えてくださった教えの実践ができていない点が多くあるが、教育に携わる者の一人としてこれからも頑張っていきたいと思う。

結びにあたって、教育に関する専門的な知識を丁寧に教えていただいたことや、多くの体験の機会を与えてくださったこと、かつ手厚くサポートしてくださった立田先生に改めてこの場を借りて御礼申し上げたい。本当にありがとうございました。退官後も関西にぜひお越しくださいね。

立田先生のご退職にあたって

柴田 峻介

私は、大学2年生から大学院修了までの約5年間立田先生の下で勉学に励んだ。学問とは何か、教育とは何かをたくさん教えていただいた。高校までろくに勉学に励まず、口だけは一丁前だった私を変えてくれたのは、立田先生との出会いのおかげであると言っても過言ではない。

立田先生との出会いは、教職を志す学生間の中で、「あの先生が一番ええで。」と噂になっていたところからだ記憶している。実際に話をすると、どんな学生であっても正面から向き合ってくれる人柄の良さが多くの学生に慕われる理由であることはすぐにわかった。

しかし、人柄の良さだけでは私を含む多くの学生がついてくるわけではない。なぜ、立田先生の周りにはこんなにも多くの学生が集まったのか。それは立田先生ご自身が誰よりも、日々新しいことを学び続けているからである。学生時代を含め、「生涯学習」という言葉を多く聞くことがあったが、このことを体現されているのが立田先生であった。どんなことでも学び、取り入れ、知識をアップデートされていくその姿が、私の勉強に対する姿勢にも大きな影響を与えた。

私が立田先生から伝えていただいた数多くの言葉の中でも、特に好きなのが「自律」である。自分を律するということだが、この言葉が全てを表していると感じる。もし、何かを成し遂げたいと思ったとき、世の中にはそれを邪魔するたくさんの誘惑がある。その誘惑に打ち勝ち、自分のやるべきことを実行するために必要な力こそが「自律」であると理解している。このことを学生時代に気づかせていただいたことは、私の人生を大きく変えた。

この「自律」という言葉を胸に、現在、私学の高校英語教員として働いている。国籍も異なる個性豊かな生徒たちがいる国際コースの担任、夢を追いかける生徒たちがいるサッカー部でのセカンドチームの監督として、まるであの頃の自分に似た子どもたちと日々関わっている。

教育現場に立っていて強く感じるのは、厳しく指導するということが難しくなっているということである。つまり、子どもたちに強制的に何かをやらせることが難しいということである。この現状から、自分を律することができる子どもと、そうでない子どもで学力だけでなく全ての面において大きな差が生まれてきている。そんな現代の教育現場だからこそ、自律した生徒を育てることが重要である。私が立田先生に教えていただいたことと同じように、自分の生徒たちにも伝えたいと日々取り組んでいる。

立田先生は、ご退職後も日々、いろいろなことを学び続けていくのだろうと容易に想像できる。ここ数年はお会いできていないが、ぜひご退職後も交流を持っていただき、いろいろな話をさせていただきたい。

立田先生との思い出

坂元 錬

いつもニコニコ笑顔で、その穏やかな雰囲気が好きでした。

立田先生は、生涯学習などの分野で授業をしており、教職課程を履修していた僕はその授業が大好きで前の方まで行ってお話を聞いていました。ICTに強い先生は、パソコンで動画や写真などの教材を活用し、授業を行っていました。その時、これほどまでにパソコンを使いながら授業をする先生はいなかったのが驚きでした。

そして、大学3年生の時からゼミで卒業論文指導をしていただきました。自分のテーマが音楽と社会的な影響についてであったので、先生の専門である教育とは違う分野でした。そのため、先生には迷惑をかけてしまったなと思います。それでも、僕が少しでも良い論文が書けるように、先生はいつも全力で指導してくださいました。ゼミの授業でたこ焼きパーティーをしたこともいい思い出です。

そんな中、大学4年生になり、新型コロナウイルスが流行しました。生活がガラッと変化し、もっとたくさん色々な人たちと交流をしたかったなと少し残念な気持ちでした。ゼミの卒業論文指導もリモートとなり、対面でない分、コミュニケーションを取ることが少し難しかったです。そんな中でも先生は笑顔で、指導をしてくださいました。

大学を卒業する少し前、教師の道を歩もうと考えていた自分に、先生は大学院へ推薦してくださいました。その時は自分が期待されているようでとても嬉しかったです。そして、大学を卒業後、そのまま神戸学院の大学院へ進みました。コロナによる規制が少しずつ緩和されていく中で、修士課程1年生の頃の授業は、ほとんどがリモートでした。修士論文を書くことは卒業論文を書くことよりも厳しいと感じながらも、一生懸命取り組みました。知らないことだらけで手探り状態でしたが、先生が付きっきりで指導してくださいましたため、不安も少しずつなくなり、自分なりに修士論文を書き進めていくことができました。修士論文作成のために学校現場へ行って、授業見学や現場の先生たちのお話を聞いたのも、立田先生が色々な場所にコンタクトを取ってくれたおかげです。大変感謝しております。

修士課程2年生になる頃には、先生と時々会ってご飯を食べました。今思い返すといつものご馳走になっていました、ありがとうございます。そして、修士論文は無事に完成し、口頭試問や修士論文発表会もなんとか終わることができました。人生の中で自分が修士論文を書くなんて思ってもいなかったのが、書き上げたことがなによりも驚きでした。ですが、完成することができたのは、自分が一生懸命取り組んだこと、また、それ以上に先生がいろいろなことを調べ、資料を集め、指導してくださいましたことが大きいと思います。人生の中で貴重な経験をさせていただきました。コロナによる厳しい状況の中、楽しく大学院生活を送ることができたのは、立田先生のおかげです。ありがとうございました。

立田先生、今までお疲れ様でした。ぜひ、これからも好きなものをたくさん食べてください！数年間ありがとうございました。

立田先生との思い出

宝来 大樹

「絶対に中学校教員になる」この思いを確固たるものにしてくれたのは、立田先生と過ごした神戸学院大学での生活です。

立田先生と出会ったのは、大学1年次の教職入門の授業でした。不安でいっぱいの中、優しく親身になって、ユーモアある授業をしてくださったのを今でも覚えています。また、立田先生には、授業を通して、大勢の前で発表する機会をたくさんいただきました。教職入門での研究発表、卒業研究発表会でのゼミ代表としての発表と、試行錯誤しながら発表した経験が、教師として勤務する中での基盤となっていることと確信しております。

2年次に入る前、新型コロナウイルスの感染が猛威を振るいました。それまで当たり前を送っていた学生生活が非日常となり、学校に行けず、オンラインで授業を受ける日々。友達とも会えず、「大学を辞めよう」と思ってしまったときもありました。そんなときでも、いつも画面の向こうでは笑顔の立田先生が授業をしてくださいました。

「みなさん元気〜？」と私たち学生を気遣ってくれる立田先生、ユーモアある面白い授業をしてくださる立田先生、そんな先生がいてくれたからこそ、私はオンラインでの学生生活を送ることができたと思っています。

そして、やっと学校に行けるようになった3年次、立田先生から「神戸市スクールサポーター」を勧めていただきました。それまでは教職の理論を学んでいただけでしたが、それが実践へとつながった瞬間でした。初めは「先生」と呼ばれることに慣れず、戸惑いもありましたが、「先生に教えてもらって分かった！」「先生が来てくれる日が楽しみ！」という子どもたちの言葉で、「絶対に中学校教員になる」という思いが確固たるものとなり、実際の学校現場で活動した1年半は、今の私の原点となっています。

3年次、4年次のゼミを立田先生と過ごし、教員採用試験の対策に力を注いだ時間は、私にとってかけがえのないものであり、教員採用試験現役合格をつかみ取れたのも、親身になってアドバイスをしてくださった立田先生のおかげです。

立田先生のような教員にはまだまだほど遠く、未熟な私ですが、いつか立田先生を越えられるくらい生徒から信頼される教員になれるよう、日々精進してまいります。

立田先生、今まで長い間本当にお疲れ様でした。これからもどうぞお身体に気をつけてお過ごしください。

立田先生との思い出

吉井 夏央

私が初めて立田先生に出会ったのは、大学1年生の教職の授業でした。私は、教員になりたいという夢を叶えるために神戸学院大学に進学しました。教職を取り、初めて立田先生の授業を受けたときに私はこの先生に4年間ついていきたいと思ったことを今でも覚えています。大学では、女子ラクロス部に所属し、週4～5日アルバイトもしていました。また、往復4時間かけて通学していたため、勉強との両立はとても大変でした。大学2年生のときにコロナウイルスが流行し、授業は全てオンラインになりました。このままで教員になれるのかなと不安に思い始めたのもこの頃でした。そんなときにも立田先生はオンライン授業のたびに「吉井さん、元気？」と声をかけてくれていました。私はその言葉にいつも助けられていました。何度も立田先生のゼミを選び、ゼミでもたくさんお世話になりました。その中でも特に私が思い出に残っているのは、卒業式の日です。卒業証書はゼミごとに各教室でゼミの先生から受け取ります。私は、4年間お世話になった立田先生から受け取ることができとても嬉しかったです。その際に私は立田先生から人文学部賞の証書もいただきました。今まで頑張ってきたと改めて思えた瞬間でした。立田先生に出会えてなかったらこんなに充実した大学生活を送ることはできなかったと思い、とても感謝をしています。

私は立田先生の、一人一人と大切に关わる姿をとても尊敬しています。今年の4月から私は大阪にある豊能地区で中学校の教員をしています。1年生の担任をし、5クラスの授業を担当しています。生徒数も多く大規模校ですが立田先生を思い出し、一人一人の生徒と大切に关わるようにしています。そうすることで信頼関係を築くことができていると実感しています。これもすべて立田先生のおかげです。

そんな立田先生に出会えて私は本当に良かったです。立田先生のおかげで私は、「人を思う優しさ」と「人と关わる大切さ」を学びました。これらのことはこれからの教員人生の中で特に私が大切にしたいものです。これから出会う様々な生徒と保護者、同僚の先生などとの関わりを大切にしていきたいです。そして自信を持って立田先生のように一人一人と大切に关われていると感じたときには、ぜひもう一度立田先生にお会いして色々なお話をしたいです。立田先生が退職してしまうのはとても寂しいですが、先生から教わったことを忘れず、次は私が立田先生のように「良い影響を与えることができる」教員になりたいです。

立田先生、本当にお世話になりました。これからもどうぞお体に気を付けてください。ありがとうございました。